

が出て、世辭いふじやねえか……、判んねえか、アノソレ、何だか知んねへがお饒舌の女が供をして八丈の着物を着て通るじやねえか 女「アー、アノ本町の糸屋さんのお嬢さんですか 李「糸屋の娘かね那やア 女「マアさうですか……、困つたねえ 李「何を 女「何を つて、彼れは一人娘でね、そらお婿も極つたやうなんですよ…… 李「ハテ然うかな、ダカラ乃公ア駄目だと云つたや 女「どうも困りましたねえ 外の所なら何とか又話のしやうもありませんけれども、家でも世話になつてる御店の何ですからね…… 李「夫じやア何うだね内儀さん、せめてアノ娘が平常持つて居



るものでも、乃公貫ひてえがさうだらうさうしてマア此所へ寄つた時に、チヨツクラ上つて話の一つもして呉れれば猶宜いだが、そんな事はなくともマア常に大事にして居る物でも貫へば夫で諦らめる

事もあるが何うか出来めえか、金は幾らでも出すが…… 女「さうでございますねそんな事が知れては大變ですが、お待なさいよ……、是れは困つたねえ……、じやア斯うしませう、貴郎だつて何うしてもと無理を云ふ譯ではなし、アノ下女のおまつといふ奴が中々の奴ですから那れに話をして見ませう 李「アー然うか、どうでも乃公の言ひ分さへ立てば、乃公は其れで我慢をする 女「じやア一つ話して見ませう……、アラ一寸マア好い工合ですよ、向ふから来ましたから、貴郎引込んでお出でなさい……、チヨイトくおまつどん……、オヤお嬢さん今日は、マアお寄んなさいまし……、どうぞお上りを……、おまつさん一寸上つてお呉れ、少し話があるんだから まつ「ナニ内儀さん 女「お嬢さん一寸御待ち下さいましよ、おまつどんに少し話があるんで……、アノネおまつどん近頃家へ来て居る、田舎の去る大家の若旦那なんですがね、親方が種々其の親父さんに世話になつたんで、此方へ来て遊んでる所がね まつ「ハア 女「其の方がマア何でね、どうしてもお前で

なければならぬ譯なんでもお前さへツンといつて呉れりやアねえ、夫やアお金の五兩や縮緬の羽織の一枚位拵らへて貰つて上げるが、何も忌な眞似をする譯ではないんだけれどもねえ……まづ「オヤ左様でございますか、どうも有難う存じます、エーモツ私のやうな者でもさう仰しやつて下さるなら……」まづ「イエサおまつどんお前ぢやア無いんだよ、まづ「オヤ左様でございますか、私は今までそんな事はないんですから變だと思つたんで……」まづ「お前所のお嬢さんだよ、まづ「シー何です田舎者が家のお嬢さんを……」まづ「女、シー、大きな聲をお出しでないよ……」まづ「マアお聞きよ、其方がねえ、お嬢さんを見初て戀煩ひなんだよ、まづ「マア嫌です、ね、女、マア斯したいんだよ、どうせ此戀は叶う氣遣ないんだからせめてお嬢さんが平常お持ちなすつてる御品でも頂たく事が出来れば其れを大切に肌に着けて、其れで諦め、其上成る事なら御傍へ一度でも出てお茶の一つも頂たく事が出来れば夫こそ思ひを遂げたやうな者だから何とかお話をして呉れろと云ふ私への

頼みなんでも、誠に罪のない話なんだがお前の計らひで何うにかなるまいかねえおまつさん、まづ「左様ですね、夫れやアマア私がお嬢様の事は一切して居るんですからお品位ゐるの事は出来なくもなし、又様子に依つては御酒は兎も角、御茶の一つも召上つて、お話ぐらいおさせ申しても宜うムいます、まづ「出来やうかねえ、まづ「夫れはモウ私に出来ない事はありませんよ、奥と表が離れてますから、表の寢静まつた時分に庭の三尺の切戸をトン／＼と叩いて下されば、私が出て開けて離れへお連れ申しますから……」まづ「女、さう、左様して上げてお呉れなら、アノ方がどんなに喜ぶか知れないよ、まづ「其の代り内儀さん、今のお金と羽織を……」まづ「女、ア、夫れは屹度御禮をするよ、まづ「じやア宜うムいます、女、何日……」まづ「さうですねえ……」明日の晩で宜うございませよ、まづ「女、さうかえ、じやア屹度だよ、嘘になると私其方に恨まれるからね、まづ「大丈夫、けれども内儀さん今仰つたこと……」まづ「其れは宜いよ、私が確かに呑込でるから、ぢやアお頼う申しますよ、まづ「宜うムいます

お嬢さん御待遠さま 女「どうも貴嬢誠に失禮いたしました、左様なら……」此おまつといふ仲働きが中々悪い奴で、慾と二人連で萬事受合つて歸りました 女「一寸李兵衛さんお聞きなすつたか 李「ヤアどうも乃公耳を澄して聞て居たが宜い心持ちで、巳での事に飛び出さうと思つた 女「何ですよ 李「乃公アア是で心持ちがサバくして、頭痛したのも癒つちまつた 女「さうでせう、ぢやア貴郎、明日の晩ですよ、お湯に入つて、床屋へでも行つて、美装してお出でなさいよ 李「ハ、ぢや、チヨツクラ床屋へ行つて湯に入つて来べい、急に腹が空つて来た、鰻飯を五ツ六ツ注文で呉れ……」サア湯に入つたり床屋へ行つたり、二度も三度も往復をして、眞赤になつて 李「今歸つて来た 女「オヤ大層奇麗になつて来ましたねえ 李「イヤどうも顔がピリ／＼する 女「マア大變ですなえ 李「何でもハア、床屋へ三度行つて湯に五度入つて、練の大袋呉れつたら大袋ツてねへといふから、成たけ糠を澤山にして貰つて、ゴシ／＼引摺つたけれどもまだどうも奇麗になつたやうな心持ちがしねえ

夫から輕石で洗はうと思つたが、痛くつて往かねぬ 女「馬鹿な事をするもんぢやアありません、踵ぢやアあるまいし……、ダガ奇麗になりましたよ……」翌日になると嬉しくつて堪らない、又御湯に入つて髪結床へ行つて、ピカピカ額を光らし、日の暮れるのを待つて居ると、ハツ時分からチラ／＼雪が降り出して、夕刻になると盛んになつて参りました 女「貴郎大分雪が降つて来ましたね 李「雪が降つても何でも構はねえ、惚れて通へば千里も一里といふ事がある 女「さうですなえ…… 李「夫とも餘り雪が強ければ装でも着て行くべえか 女「色男が装を着る奴がありますかね、其扮装では往ません、シツカリ美装してお出でなさい 李「ぢやア着物着換て来るかな……、何うだ是なら宜らう 女「アラマア大層丸くなつて…… 李「ウム乃公着物がねへとても思はれるとなんねへから、襦袢三枚着て胴着を四枚に小袖を五六枚重ねて着た 女「アラ何ですなえ判じ物見たやうな……、併し寒い所を行くんですから澤山着て行つた方が風邪を冒かないで宜うぞいませう、ぢやア此の傘を

印があるよと面倒だから無印なのを出して置きました。先方へ行つたら餘り大きな

聲を出しちやア可ませんよ 奎「大丈夫だ 女「ちやア分

つてませうね、新道を曲つて御庭口の方の三尺の開きを

をトン／＼ 奎「ア、分つ

てる 女「そんなら貴郎緩

くり行つてお出でなさい

お楽しみ……」脊中を

叩かれて奴さん嬉し喜こ

んで出掛ける。

佐吉「エ、寒い強く降つ

て来やがった、此の鹽梅ぢやア今夜はウ

ント積るだらう、ア、仕様がねえ、下駄の齒へ雪が狭まつてどうも歩き惜い、獨り



言をいひながら佐吉といふ男が黒堀の所でトン／＼／＼下駄の齒の雪を拂ふ途端に

まつ「ハイ」トン／＼／＼ まつ「ハイ……」ギイツと三尺の開戸が開いて まつ「マ

ア大層遅うムいましたねえ、雪の降るのに能く入らつしやいました、待つてました

よ 佐「へエ まつ「御傘を此方へ御出しなさいまし 佐「オヤ／＼何だ、傘を持つてつ

ちまつた……」此所は糸屋の庭口だ、今出て来たのは女だ…… まつ「サア何をし

て在つしやるんで、此方へお入んなさいましよ」手を取つて引かるゝまゝにズツと

中へ入る、ガチャ／＼と搔鉢を掛けて終ふ、此方は奎兵衛さん、番傘を擔いで……

奎「ア、強い降りだ……、御免なせい（トントン／＼）御免なせい、御約束の色男

が参りました、オイ開けてお呉んなせえ……、ハテナ、違つたかな、此所ぢやア

ねへか知らん……、ア、此所だんべえ（トン／＼／＼）御免なせえ、モシ御免な

せえまし ○「ハイ／＼、何でげすか御買物なら明日願ひます 奎「アツこれは違つた

是やア往かねえな……、此所かな……、御免下せえ、御約束の色男が参りました

た」と町内終夜叩いて歩いたが何所でも開けない、モウ夜が白んで来て、落膽して歸らうと思つて来る、丁度糸屋の庭口三尺の開きがギイツと開いて、まづ「どうも誠に御疎勿様でございまして……」李「アッ此所だ……、是れは駄目だ誰か乃公より先きへ入つた奴があるな、どうも呆れた誰だなア乃公より先きへ入つたなア……」夜は明けて終ふ、仕方がないから奴さん、茫然傘を擔いで歸つて参りました李「ア、今歸つて来ました女「マア驚ろきましたねえ眞正に、昨夜お歸んなさるだらうと思つて火を熾して寐衣を温ためて待つて居たら昨夜泊りましたね、マアお楽しみ様 李「お楽しみどころか、えらお苦しみだツた 女「オヤ何うして 李「何うにも斯うにも何處を叩いても開けて呉んねえ 女「マア訝しいぢやアありませんか 李「町内中叩いて歩いたが駄目だ 李「忌ですよ夜番ぢやアあるまいし町内中叩いて歩いたツて仕様がなぢやありませんか 李「所が開けて呉れねへ譯がある 李「何うしました 李「明方になつて歸つて来やうと思つて来ると丁度糸屋の庭口へ出た、矢張り昨夜最

初に叩いた所に違へねえ 女「成程 李「スルと三尺の開きが開いて、大きに御疎勿様だと云つて女子に送り出されて来た奴がある、何でも乃公より先きへ入つた奴に違へねえ 女「マア呆れましたねえ、彼所いらに然んな事がありますかね、眞正に呆れましたね、アノ又たおまつといふ仲働らきが悪い奴だからね……、シテ其の出て来た男といふは何んな男でした 李「何でもハア色の生白い……、ア、内儀さん、今彼所を通るアノ野郎だ 女「マア指差しをおしなさるな……、オヤヲヤマア驚ろいた、彼奴がですか 李「ウム、那やア一體何ですが 女「那れはね、元二丁目の芝居者で、一寸悪い事があつて拂はれたんですが、好い聲でね、お祭佐吉といふ綽名のある好男子なんですよ 李「ナニ御祭り……、ウムどうれで乃公はだしに使はれたんだ。」

◎先代柳枝落語會

郵税共金廿錢



柳亭燕枝



エー一席申上ます、馬鹿も百馬鹿あるとか申しますが、却々数の多いもので然うでムいませう、色ッぱい馬鹿もあれば、又は食ひ意地の張つた馬鹿、お喋舌馬鹿などいふのもあり、然う

かと思ふと人の眞似をする馬鹿がある、鶺鴒の眞似をする鴉水に溺れるとか申して、人の眞似といふ奴は可んものでムいます 父「一寸此處へ来い、何所々今まで行つて居た 伴「お父さんお使ひに行つたんじやアないか 父「乃公の使ひに何所まで行つた 伴「何所だつてお父さん自分で使ひに遣つといて忘れちまつちやア困るじやアないか 父「乃公が使ひにやつたのは本郷だ 伴「夫ほど知つてるのを聞かないツて宜いじやアないか 父「夫でも時間が餘り掛り過ぎるから聞くんた、相變らず又道草を食

つて居たな 伴「串戯いつちやア可ない、馬じやアあるまいし、道草なんぞ食ふもんか、ズーツと歸つて来たんだ 父「其れで斯んなに手間の取れる譯がない、何か見て来たらう 伴「其やア見て来た 父「ソレ見ろ、何を見て来たんだ 伴「本郷座の前を通つたら看板が出て居た、本郷座は明日開くんたよ 父「馬鹿なことをいへ、此間の芝居が濟んだばかりで、跡の狂言が極つたか極らないかといふ所で、まだ一然う急に開くものか 伴「だつて阿父さん、看板に近日開場仕り候と書いてあつた…… 父「其れだから貴様は馬鹿だといふんだ、近日開くといふんなら明日開くんじやアない 伴「親父さんは字を知らねえから困つちまう、近日とは何だと思つてるんだ、近い日と書くんだよ、今日からじやア明日が一番近い日じやアないか、だから明日開くんた 父「生意氣に理屈をいふな、何日開くんたか、まだ判然分らないから近日開場仕り候、近い内に開けるといふ事を書いてある、詰り人氣を寄せる爲めだ、家で商ひをしても見すく流行ない品でも、斯ういふ物が捌口が宜しうございますと

いへば、素人衆はドン／＼お買ひなさる、商賈は懸引が肝要だ、何でも商ひ氣といつて、氣を働らかせなければ往かない、早い話が貴様に用を云ひ附る、一つ云ひ附つたら二つ氣を働らかせ、二ツ用を云ひ附つたら三ツ働らかせるといふやうに、先きへ／＼と氣を働らかせろ 伴「ウム、其じやア何でも先きへ／＼氣を働らかせれば宜いんだね、父「然うだ 伴「何だ、譯エねえこつた 父「どうして譯エないどころか、其れが出来りやア馬鹿じやアない 伴「ナニ先きへ／＼と氣を働らかして終やア宜いんだ、俺は今夜寝る時にチャンと顔を洗つて寝ちまふ、然うすると明日の朝起きて顔を洗はねえで済むだらう 父「馬鹿をいふな、前の晩に顔を洗つて寝る奴があるか 伴「だつて先きへ／＼と氣を働らかせるにやア其の位にしくちやア往けねえ、お飯を食べる前に茶碗を洗つちまつて、便所へ行く前にお尻を拭いちまうんだ…… 父「下らねえことをいふな、其だから貴様は馬鹿だといふんだ 伴「親父さん何處へ行くんだ 父「一寸用場へ行くんだ 伴「エー 父「用場へ行くんだよ 伴「用場へ行くなら

先きにして入つたら宜らう 父「まだ那んな事をいやがる、先きに小便が何所で出来る 伴「外ですりやア宜い 父「籠棒な、外でしちまつたら用場へ入るにやア及ばねえマア行つて来る 伴「オイ親父さんまだかえ 父「今入つたばかりだ 伴「早く出てお出でよ……、サア手をお出し、水を掛けて上げるから 父「アハ、ハ、大層氣が附いたな 伴「親父さんお茶を入れたから、お菓子は何か買つて来やうか 父「菓子は食ひたくねえな 伴「然うかい、夫じやア御蕎麥を誂いつて来やう 父「蕎麥も可ねえ…… 伴「エー 父「蕎麥も可ねえよ、二三日前から持病の疝が兆して酷く下ッ腹が張つて腰が痛んで可ねえ 伴「疝だい 父「ウム疝氣でどうも難儀だ 伴「其やア大變だ 父「コレ／＼何所へ行くんだ、アハ、ハ、何所かへ出掛けて行やアがつた、併しサア馬鹿だ／＼といふやうなもの、年は薬だなア、云つて聞せれば少しは分る、廁から出れば水を手へ掛ける、座れば茶を汲んで出す、菓子を買つて来やうか、蕎麥をさういつて来やうかと、氣の付くだけが不思議だ、馬鹿でも年が来りやア何うやら役に立

つものだ…… △ハイ御免 父「オヤ之れは御珍らしい、どうぞ此方へお昇り下さい  
 い △イヤどうも御無沙汰を致した、併しマア醫者の無沙汰は此方の爲だが、何か  
 御病人があるさうで、何所にお出でだ 父「どうも先生、其の節は種々御世話様にな  
 りまして有難う存じます……、ナニ病人が手前に……、ハテナ先生其れは失禮  
 ながら横丁の伊勢屋のお間違ひではございませんか 醫「ナニお前さん所の悴が今息  
 を切つて嘔けて来て、急病人が出来た、直ぐに見舞に来て貰ひたいといふのだ、生  
 憎と二三人病人が来て居るので、其れを診てから往くといつた所が、其じやア間に  
 合はない、直に〜と斯ういふものだから、譯を話して病人に待て、貰つて来たが  
 何か親類の泊り客でもあんなさるかえ 父「其れでは手前共の悴が然んな事をお願い  
 に出ましたか、どうも仕様のねえ野郎でございます、とんだ事を申上て済みません  
 ナニ貴所、餘り氣が利きませんから、人間は先へ先へと氣を利かせなければならな  
 いと、叱言を申しましたので、私が些ツと疝氣の加減で腰が痛いと申したのを聞い

て、先生の所へ然んな事を願ひに出たのでございませう、イヤどうも申譯がござい  
 ません、別段にお薬を頂戴するなどの病人ではございませぬ 醫「何のこつた、然う  
 かい、私は又急病だと云ふから、誰が悪いのかと思つて、心配をして飛んで来た、  
 薬を服まないで済む位なら結構だ、じやアお暇をしやう 父「マアお茶を一ツ召上  
 つて 醫「イヤ家に病人が待たしてあるから、また緩くりと来る 父「左様でございま  
 すか、どうも相済みません……どうも仕様のねえ奴だ、迂闊叱言も云はれない……  
 …… ○ハイ御免下さい 父「誰方で……大層大きな物を脊負ひ込んで来たな……  
 何ですえ ○私は横丁の早桶屋でございますが、どうも此方様ではとんだ事でござ  
 いました 父「何だい 早桶屋へエ、頭抜け一番といふ御注文でございましたが、生  
 憎手前共に出來合ひがありませんで、併し此前御家内様の時にも種々御最負に相成  
 りましたから、どうしてもお間に合はせなければならぬと存じまして、仲間中を  
 駆け廻つて、漸とお間に合せましてございませぬ承はればお手少なのやうでございま



すから、お手傳ひ旁々附屬の品を取揃へて参りました、之は枕團子、之は櫛の一本花、之は線香立の土器、之は白木の位牌……父「オイ、冗戯じやアねえ、然んな物を店ッ前へ列べられちやア困るじやアねえか、俺の家には誰も死んだ者はない縁儀でもねえ、巫山戯ちやア往けねえ、早へエー、お宅では何誰様もお歿れなすつた方はございませんか、父「誰も死にやアしねえ、縁儀が悪い、其んな物を店ッ前へ並べられて堪るもんじやアねえ、持つて歸つてお呉れ、早へエー旦那、冗戯じやアございません、私は何も貴所の處へ押賣りに來た譯じやアございません、御宅の御子息さんがお出でなすつて、直ぐに頭拔けの一番を持ち込めといふ御注文でございませんから、只今申上げました通り、諸方駐廻つてお間に合せました譯で、縁儀が悪からうが宜からうが、手前共の方では商賣でございませんから、御冗戯に然んな事を仰しやられちやア困ります、是非とも買つて頂かなけりやアなりません、決して押賣りではありません、御注文のない物を持つて上つた譯ではございません、父「其や

ア然うか知れねえが、早桶の買ひ置きは出來ねえ、持つて歸れ、早持つて歸れと云つて、御注文があつたから持つて出たので、どうも然ういふ譯になりません、書付けにして参りました、どうか之だけのお拂ひを願ひます、父「冗戯云つちやア往けない、要りもしねえものを誰が錢を出すものか、早出さなけりやア取るやうにして取つて見せます、裁判へ出ても必と取るから、どうか然う思つて下さい、父「アツ置いてつちまやアがった、斯んな物を店ッ前へ持ちこまれちやア仕様がねえな、鶴龜、馬鹿め何處へ行きやアがった、父「阿父さん、今歸りました、父「野郎、今歸つたじやアねえ、何だつて醫者へ行つたり、早桶屋へ行つたりしやアがったんだ……父「ナニ是から直ぐ寺へ行かうと思つたんだが、一人で行くもんじやアないつてえから、伯父さんの處へ行つて頼んで寺へ往く心算なんで、父「馬鹿野郎、迂濶叱言も云へやアしねえ、店ッ前へ此んな物を擔ぎ込んでどうする心算だ……父「源兵衛さん、何うしたんですね向ふの家じやア、悴が出たり這入つたりして居ると思

つたら、間もなく横丁のお醫者様が来て、後から早桶を擔ぎ込んだが、誰か死ましたかね 源「左様さ、親子二人暮したが、親父はモウ少し先刻表を掃いてたやうで……」○「其でも悴が出たり這入つたりして居る所を見ると、誰か死んだに違ひないア、御覽なさい、簾が掛つた、忌中てえ札が出ましたよ 源「成程、忌中の札を出す位おじやア確に死んだに違ひない、早桶まで擔ぎ込んで見りやア間違ひない」○「ハテナ誰が死んだんだらう 源「ア、解りました吉兵衛さん、此前向ふの内儀さんの歿なつた時、お前さんと私と二人で、未だ老朽ちた年でもないに、男ばかりじやア不自由だから、茶呑み友達をと云つたら今更此の年をして茶呑み友達でもございません、殊に那の通り愚の悴がありますから、繼母の手に掛けるも何ですから、不自由を我慢して男世帯でやりますと立派な口を利いたが、其の後何だかチヨイ〜年増を見受ける、必と茶呑み友達を置いたに違ひないが、豈か今更になつて然うとも云ひ兼ねて、隠して置いたに違ひない、其が必とお目出度くなつたんだらう 吉成程

さうかも知れない、然うして見ると弘めはなくとも、向ふ三軒兩隣り、交際で捨て置く譯にもなりません、此方から氣を利かして、悔みに往かなけりやアなりますまい 源「然うですね、じやア一ツ悔みに往きませう」と相談の上で出掛けまして…… 源「御免下さい 吉「今日は、御免下さい 父「ハイ、何誰かお出でなすつた……」馬鹿野郎、何處へも出ちやアならねへぞ……、オヤ是はお向ふの旦那方、お揃ひで……」どうぞ此方へ 源「眞平御免下さいまし 父「サアどうぞ此方へお昇り下さい……」源「イヤ飛んだお取込みの中へお邪魔に出まして……」源「イヤ別に取込んで居りません 吉「マアどうも此方でも飛んだ事でございまして、能く〜御家内に縁がないものと思えまして、どうもハヤお氣の毒様な譯で 源「何ですつて、變な事をお言ひなさる 源「ツイ伺ひも致しませんでした、御家内は何日頃から御病氣で 吉「イヤ家内と云つては、貴所方も御承知の通り先年歿になりました、別に後を迎へも致しません 源「イヤ御家内といつてはさうかも知れませんが、失禮ながら茶呑み友達と

ましたけれども、併し何も逸つてお悔みに上つた譯でもないの、實は表に、忌中の札が出たものでムいますから、何誰かお逝去になつたのかと思ひまして、お悔みに上りました、吉エー、忌中の札が出ました、馬鹿野郎、呆れた野郎だ、何だつて忌中の札なんぞ出したんだ、伴阿父さん、近所の奴は馬鹿だね、父何が馬鹿だ……伴其でも添書きを見ずに這入つて來たもの、父添書きが、何としてある、伴近日……」

初代燕枝編

滑稽三題噺

郵税共金廿錢

いふやうな事でお置きになつたのが……吉ア、其じやア何ですか、横丁の醫者が參つて、其の後から早桶を擔ぎ込んだので、私の家で誰か死んだと思つてお出でなすつたのか、其なれば誠にハヤ馬鹿々々しい譯で、お話にもならない、忤めの仕事でな、實は是々斯ういふ譯でございまして、別に死んだ者はございません、然うでございませうか、其やアどうも飛んだ事を申し上げました、私共は又……ねえ吉兵衛さん、どうも訝しいと思ひ





五明樓玉輔

往來に風呂敷包みになつて落ちて居て、慾張つた人間が來たら、拾ふだらうと待つて居る中に横合から犬が來て噛まれたり何かする、同じ化ても人に怪我などをさせる事は澤山ございませぬ、何故かといふと、狸は人間の前へ何か形を現はして進む事を遮るものでございませぬが、狐は前に何のやうな危険がありましたも、往來に見せたり何かするから谷へ落たり川へ落たりするやうな事がございませぬ、只今は開けまして、狐や狸を東京内で見ると、古へは随分白晝でも上野近邊では狐狸を見る事がございませぬ、まだ其れでも場末へ参りますると、白晝でも見ない

狐狸は毎度人を訛すといふ事を能く申しませぬが、同じ悪戯をしながらも狸の方が誠に可愛い處がございませぬ、其の代り時々やり損なつて殺されるやうなことが幾らもありませぬ

といふ限りはございませぬ、狸の子を捉まへて悪戯の子供が集つて首へ繩を付けてツル／＼引摺つて居ります上から長い棒で打ち叩いて居る。○「オイ／＼可愛想にそんなことをしては往かない、犬だか猫だか知らないが、終ひには死んで了ふ、止しなさい／＼、助けてやんなさい。小兒伯父さん是は殺しても宜いんだよ。○「殺しても宜いものがあるものか、可愛想だ助けてやんなさい。小兒是やア猫や犬ぢやアない狸の子だよ。○「とんでもない事をする、狸の子などを殺して見なさい、親狸がどんな崇りをするか知れない。小兒モ親狸が毎晩悪戯をするから、其の敵討ちに子供を殺して了ふんだ。○「そんな事をしなさんな、お前の阿父さんや阿母さんが、悪い事をしたのをお前に祟つたら何といふ、俺の知つたことじやアねへと云ふだらう、其れと同じ事だ、此の子狸の知つたことぢやアないから助けて遣んな、だが只貰ふ譯にも往かないから、菓子と狸と交換こしやう、トいつて伯父さんが今此處に菓子を持つて居る譯ぢやアない、此處に何處に菓子屋があるか知らないから、お錢を上げるか

ら其れでお菓子を買つて皆んなで分けてお食べ、併し澤山は上げない、伯父さんは貧乏だから是ッしきやアない、サア是で負けてお呉れ、少伯父さんの貧乏は云はな  
いでも判つてる。○「ナニ、どうして判る。少貧乏相だ。○」生意氣なことを言ひなさ  
んな、サアサアお錢を遣たつら狸を此方へ渡しなさい、オイ狸々、何だつて汝此  
な所へ眞晝間出て来るんだ、本來子供同志だからお互ひに仲好く遊ぶべきだ、其れ  
を那アいふ酷い目に遇ふといふのは、平素汝の親達が矢鱈に人間を脅したり何かす  
るものだから此んな事になる、親の因果が子に報ふといふは此の事だ、親達が餘ま  
り悪戯をするもんだから人間の小兒に捉まつて、既に殺される所を人間の親に助け  
られて歸つて来た穴へ歸つたら能くさういへ、サア〜早く往け〜」と逃して  
やる、人間の五音の通じたものか、二三遍後ろを振返つてさも有難さうに狸は逃げ  
て往きます、どんな者でも活物の命を助ければ蟲一疋でも誠に好い心持のもので  
あります、用足しをして一廻り廻つて歸つて来ました、時はモウ日がトツブリ暮て

居ります、獨身者のことでもありますから、暗い所へ入つて明火を茫然點けて四布々  
團に柏餅といふ寝方、枕に就たが眠られず、モジ〜致して居りますと、表をトン  
〜と叩く者がある。○「誰だへ表を叩くのは。△今晩は〜。○」何方でございます  
△「狸でございます。○」エー狸でございます。○「ナニ武田 狸狸だ」判然口が利けな  
い。○「何だか判らねへ、狸が物を云ふやうでなく判然云つて呉れ 狸其の狸だ……  
○」ナニ狸々なぞに用はねへ 狸用があるから来たんだ。○「狸なんぞに心易いものは  
ない 狸之れから親類になる。○」馬鹿な事を云へ、狸に親類になられて堪るものか  
……、ア、魔物といふものは恩を仇で返すといふが其れに相違ない、乃公が晝間  
狸の子を助けてやつたのを、却つて乃公の所へ脅しに来やアがつたな 狸晝間のお  
禮に來ました。○「禮なんぞに來ないでも宜いから歸れ〜」狸却々歸りません、一  
寸開けてお呉んなさい、開けることが出来なければ欄間から這入ります。○「欄間な  
ぞから入つては可ねへ、待て〜今開けてやるから、そんな物に化されると、乃公

は目を眩して了ふから、口ではボン／＼いふが餘まり度胸の好いのでないから、晝間でも氣味の好いものでない、況して夜には猶往かねへ、今開けて遣るぞと、サア狸開けた、入つて来い……、ヲヤ何所かへ行つて了つた、矢ッ張り脅かしに来やアがつたらし……、籠棒めえ、口ばかりぢやヤねえ、心から強いんだ、狸なざア張り殺して了ふ、何千疋でも持つて来い、狸親方威張つても可ません、疾に此方へ入つて居ります。○「氣味の悪い奴だな、何處から入つた、狸貴所の股を潜つて入りました、大層禪が汚れて居ります。○」大きなお世話だ、禪の検査までしやアがつて狸の癖に座敷へ昇り込んぢやア困るぢやアねへか、全體何しに來たんだ、狸晝間危い所を助けて下さつて誠に有難う存じます、穴に歸つて親に話を致しましたら、兩親共喜こんで、行つて恩返しをして来い、恩を知らない奴は人間も同様だといひましたから……、○「酷いことをいふな、狸恩返しのお當分お側へ行つて御用を達して来いと云ひますから參りました、どうぞ御遠慮なく御使ひなすつて下さい。○」幾

ら恩返しだつて狸を使つて居られるものか、さうでなくとも世間の人だ狸に似て居るの、河童に似て居るといふ位だ乃公まで狸と間違へられて袋叩きにもされたりにやア仕様がねへ、第一折角助けてやつた汝が又酷い目に遇ふと可ねへから歸つて呉れ、狸其れでも此儘歸ると兩親に恩知らずめ、こんな奴は穴へ入れる事は出来ないと小言を云はれますから、どうぞ當分お置きなすつて。○「其れじやア又無理に追出して犬にでも噛まれると可ねへから、今夜だけ家へ泊めてやる、夜が明けたら乃公が穴へ連れて行つて親に遇つて話をしてやるから、汝も恩返しを済まして來たとさう云へ、今夜だけ家へ泊めてやらうけれども、穴と違つて人間の家は寒いが布団が一枚しきやアねへ、さうかツて汝と一緒に寝るのも嫌だ、狸イエ寢床は持つて居りますから宜しうございます。○」感心だな、布団を持つて來たな、狸布団は持つて居りませんが、罌丸を冠つて居ります、狸の罌丸八疊敷き、小兒は四疊敷、貴所にも罌丸を掛けませうか。○「罌丸を掛けられて堪るものか……、人間は四布々團で

柏餅になり、狸は翠丸を冠つてゴロリと寝て了つた、ガラリと夜が明ける。狸「モシ親方、御起きなさい親方、寝坊だなア、朝寝をするやうなことでは工面が好くならない、早く目をお覺ましなさい、親方。〇「へエ〜……、ヲヤお出でなさいまし、貴所は何方のお爺さんでございますか。狸「お爺さんではございませぬ、昨夕参つた狸で、夜が開ると寝て居られません、飛起きて了ひましたが、狸のまゝでは居られませんから、一寸爺に化けました、何方の目にも人間と見えませう。〇「ウム乃公が見ても人間だ、巧く化けた、どうしても眞物の爺らしい。狸「一寸面付が貴所に似て居ませう。〇「串戯じやアねえ、さうして見ると乃公は能く狸に似て居ると見える、何しろ巧く化けた、然し家に居ても肝要の食物がない、乃公は朝起きると顔を洗つて飯屋へ行つて飯を食つて来る人間だ、お前何か拾ひ食ひでもするか。狸「ナニモウ御飯を買つて来ました。〇「御飯を買つたつて錢も札も乃公の所には無え。狸「今火鉢の抽斗を開けたら、端書の古いのが入つて居ましたから、壹圓札に見せて買つ

て来たんで……。〇「へエー、其いつア剛儀だ、古い端書が圓助になるツてえのは有難え、じやア汝當分家に居て呉れるか。狸「直ぐに歸ると恩知らずだといつて叱られますから、どうか當家へお置きなすつて……。〇「じやア汝を助けてやつたのを恩に掛ける譯じやアねえが、後生だ、汝を置いて工面を能くしやうとは云はねへが借金で恐ろしく義理の悪い人間になつてるんだ、其れだけ一片を着けて呉れねへか。狸「借金といふのは何の位で。〇「今斯うやつて居る中にも来るか知れねへ、越後の縮屋に五圓借があるんだ、此れが度々来るんだが、どうも都合が出来ねへんで段々延ばして置たけれども、今日はモウ言譯の力も盡きて終つたんだ、どうだ汝五圓だけ拵へて呉れねへか。狸「其れがどうも端書か木の葉では貴所が使つて札に見えませぬ。〇「成程、斯つア困つたな、何とか工風はなからうか。狸「じやア私が札になりますから貴所お使ひなさい。〇「汝其の身體で札になれるか。狸「私は何にでも化けられないことはありません。〇「其れじやア氣の毒だが、汝壹圓札を五枚ばかりに化け

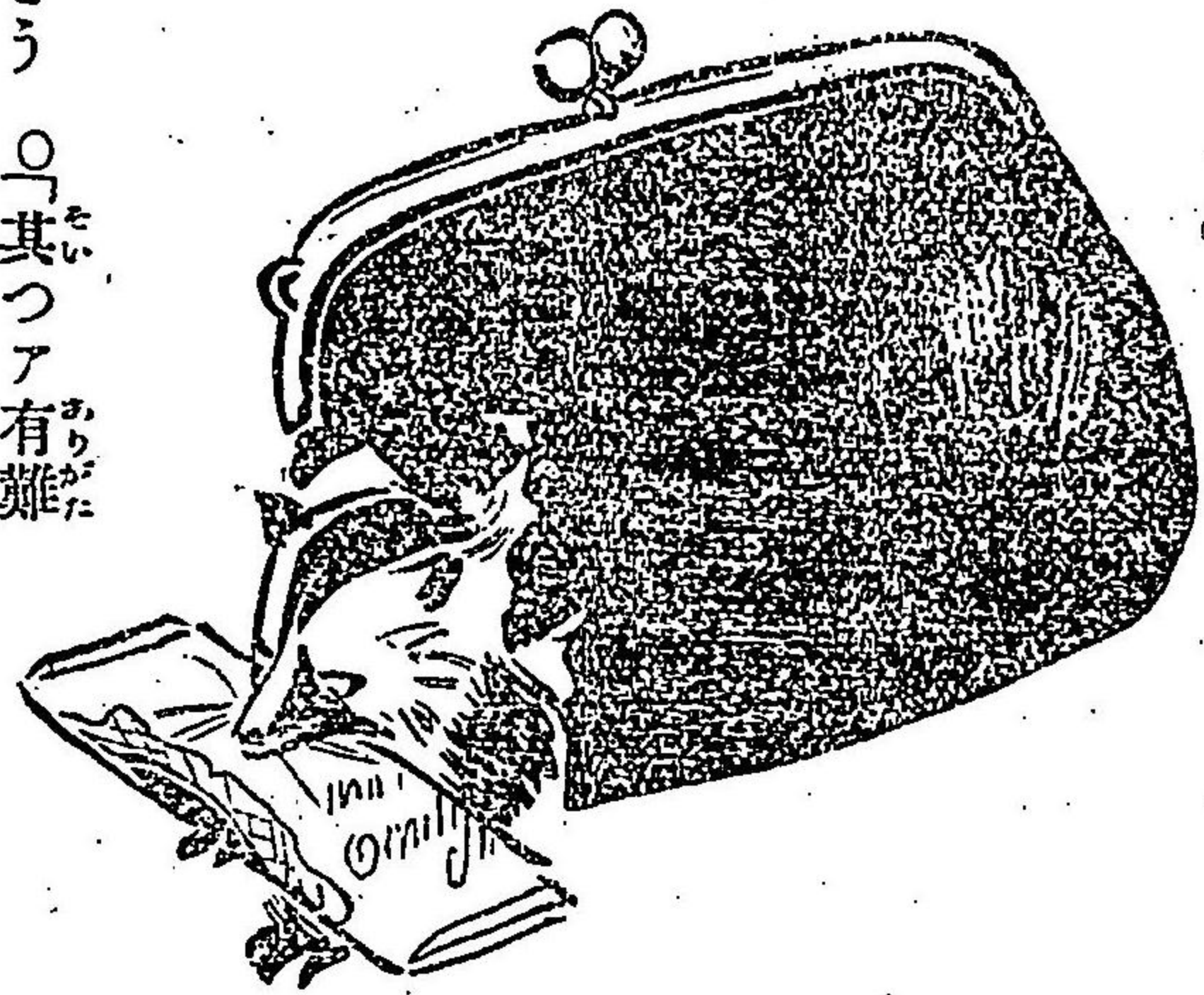
て呉れ 狸 其れは親方可ません。一つの身體で五枚にはなれません、一枚ならなり  
ます。○「成程、そんなら五圓札一枚で結構だ 狸 宜しうございます、どうか手拍子  
を三ツ打つてお呉んなさい、此處が肝要だから。○「宜し〜じやア頼むせ、宜いか  
……………ホラヨイ〜……………とチャ大きな札を造らへやがつたな、馬鹿ア、疊四  
疊敷もあらア幾ら五圓札だつて斯んなに大きいもんか、澁紙と間違へらア、ツツと  
最つと小さくなつて呉れ……………まだ〜行かねえ、座布團位ある、モツとズツと小  
さくなつて……………マ、ア餘まり其れじやア小さ過ぎる、印紙位になつちまつた、  
モ一些と大きく、ア……………縦に細長くつちやア可ねえ、横に……………ウム其處  
だ〜、宜しツ……………ア巧く出来上つた……………、何だつてノコ〜歩くんだ、札  
が歩いちやア可ねえ 狸 先方から來ない中に此方から行きませう。○「札が一人で行  
く奴があるものか、手に取つても大丈夫か……………オヤ持上らねへ、札が踏張つちや  
ア仕様がねへ……………ウム成程巧く化た……………オイ〜狸、是やア往かねへ、表は宜

いけれども裏は毛だらけだ、毛の生えた札があるもんじやアねえ、毛を引込まして  
呉れ……………サア來た〜縮屋が來たから巧く懐中へ入つてツて呉れ 狸 へエ大丈夫  
でございます。△「お頼み申します。○「誰だへ。△「エー私でございますが、親方さんは  
御家でございますか。○「縮屋さんか、どうも濟まない、僅かばかりの事で、度々足  
を運ばして。△「どう致しまして、何とも相濟みませんが親方さん今日は是非ともど  
うかお願ひ申します。○「ア、上げるよ、お前が來るだらうと粟を喰つて作らへて、  
今スツカリ出来上つた所だ、來やうが遅いもんだから、此方から出掛けやうと思つ  
た所だ。△「其れはどうも御氣の毒様でございます。○「じやア五圓儲かに上げるよ  
間違ひはなからうが、後で又失なつたなんといはれると困るから、一筆受取を書て  
つて貰ひたい。△「畏こまりました……………へエ御受取を之へ、金子は儲かに頂ださま  
した。○「儲かだね、後で何かいつて來ては可ないよ……………じやアマア大事に行つて  
來るが宜い、腹が空つたら何か拾つて摘んどくが宜い、犬にでも噛れねへやうに氣



を注ぎて行きねへ、△「親方何を云つてお在で、些とも解りませんが、〇「ナニ此方のことだ、△「何れ又來年伺ひます、〇「ア、來年はズツと大きに八疊敷位の札を造へて置く、じやアマア其の心算で道中氣を注ぎてな、左様なら……、〇「遂々五圓助かつた、さうだいなノ札を懐ろへ入れて行つたが、狸に化けて居たら縮屋は驚ろくだらう、マア、是で一つ借金濟しが出來た……、併し考へて見るとマア縮屋、狸を懐ろへ入れて越後まで行つて終やアしないか、五圓ばかりの形に重寶の狸を持つて行かれちまつては大變だ、第一狸も可哀想だ、親に遇ふ事が出來ねえ、どうか巧く抜け出して早く歸つて來れ、ば宜い……、狸親方只今、〇「オー、モウ歸つて來たのか、狸モウ札は御免蒙ります、札になるのは懲りました、〇「露顯したか……、〇「露顯はしません、貴郎が訝しな事を云つたもんだから、路次の外へ出ると懐ろから出して、透して見たり、叩いて見たり、グルグル巻いたり、終ひには二つに折られました、背中が折れるかと思ひました、其の上蓋口に入れてピンと蓋を

されちまつて出ることが出來ません、息が詰つて苦しいから墓口の端を喰ひ破つて漸やく逃げて參りました、其の代り中に一圓札が三枚ありましたから御小遣ひにと思つて持つて參りました、〇「ナニ一圓札を三枚、どうも抜け目がないな、何しろ汝の庇蔭で遂々縮屋を瞞着して了つた、所で汝にモウ一つ頼みがある外じやアないが、乃公の檀那寺の住持が大變茶の湯に凝て、釜の好いのがあつたら世話をして呉れと頼まれて居る、出入をして居て損の往かねへ寺なんだな汝どうだ、釜になつて呉れねへか、狸エー譯えありません、御恩返しにやりませう、〇「其つア有難い、矢つ張り手拍子を三つかソレ宜いか、ヨイ……、成程



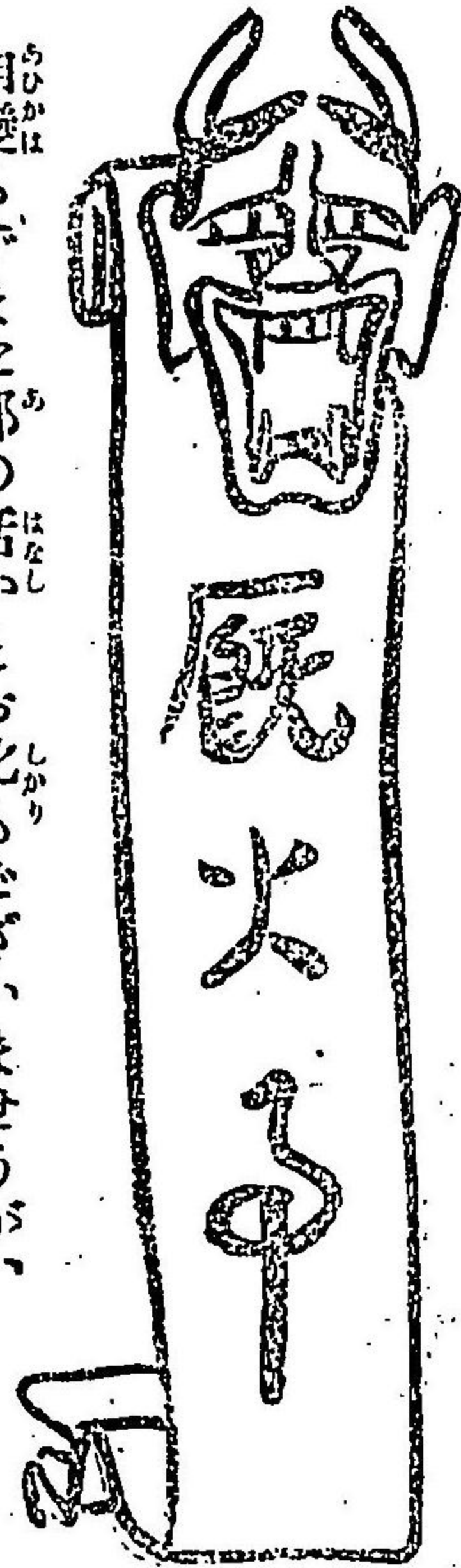
どうも不思議だ、釜が一つ出来上つた……ア、之は往かねへ蓋がない、狸蓋は跡から造へられます尻尾で……○「成程旨く出来たな、宜しく、之を一つ箱へでも入れて……」狸親方箱へ入れては可ません、息が詰つて了ひます○「じゃア風呂敷へ包んで行かう……少し窮屈だらうが我慢をしろ……ア、犬が来た、ヤイ、畜生、釜の臭ひを嗅いでやがる、ヤイ此奴めえ……」狸へエ○「釜が返事をしちやア可かねへ……お頼み申します」辨「ドレ……イヤ是は御出でなさい」○「辨長さん御無沙汰をいたしました、少々伺ひますが、御住持は在つしやいますか」辨「へエお在でございませぬ、ズツとどうかお昇り下さい」○「昇つても宜うございませぬか」辨「御馴染みだから構ひませぬ」○「じゃア御免なさい……御住持様今日は、佳、オー是は、能うこそお出で、サア此方へ、暫らく御見えがなかつたから、どうなすつたかと蔭ながら御案じ申して居たが、相變らず御達者で結構御商賣が御忙しいのは何より」○「へエ、ツイ上らうと思つて居ながら、手前にかまけま

して御無沙汰を致しました、兼て御頼みの茶の湯の御釜がムいましたから、持つて参りました、私には良いか悪いか判りませんが、一寸御覧なすつて……佳「これは御心に懸けられ忝けない其の品でござるか、早速拜見をいたさう」○「へエ是でございませぬが風呂敷へ包んで家を出やうと思つたら犬が臭ひを嗅ぎやアがつて……」佳「何でござるな」○「イエ、此方のことで、佳「ア、是は形が面白い、餘程良い形ちでございます」○「へエ、形ちが悪いと云へば何うにでも直ります」佳「シテ見ると數がありますか」○「イエ只た一疋」佳「一疋は訝しいね、併し餘り高金では求めかねるが、價は何の位で」○「へエ直段ですかえ、直段の所はマア先方でいふには大負に負けて……」圓位といふんですが、佳「ハア」○「ナニ其の……」圓位といふんで、佳「十圓位かと仰つしやるか」○「へエ、左様でございます、十圓で」○「ハア、然し斯様なものは試して見ないと可んもので一旦爐へ掛けまして、湯を沸らして見ませんと」○「へエ、火の上へ載けては可哀想で、尻を火傷します」佳「御冗談

ばかり……。「マア少し待つて下さい、少し金の入用があつて表に人を待たせてあるんですが、何時までも待たせて置く譯になりません、金を渡して歸したうございませう、どうか幾らかお金をお借り申したいもので、佳「ハア、左様なれば未だ全額差上る譯にも往かんが、御手附けとして五圓だけ差上げて置ませう。」へエ半分頂けば澤山でございます、有難う存じます、じやア一寸行つて渡して参りますか、どうか成たけ火傷をしないやうにお願ひ申します、大きにどうも辨長さん御世話様で……御免なさいよ……。佳「辨長や、どうも堅い人で、頼まれた事を忘れずに心に懸けて釜を持つて來て呉れた、是は所謂人間の親切といふもの、何でも人は斯うなければならぬものだ、併し試して見なければ品の善悪は分らない、爐へ炭を熾して、一旦湯を沸らして見るから水を半分入れて持て來なさい、まだ買ひ取つた譯ではないに依て叮嚀に致せ、半分水を入れ、ば宜い、疎勿のないやうにいたせ辨「へエ畏まりました……。」。「マア、マア……御前どうも之は變テニでござら

ます、水を入れたら釜がブル／＼と震へました、佳「震へるといふことはない、尻が圓いものだから、平らの所へ置けば動く、辨「其れからまだ不思議なことがありません、佳「何だ、辨「蓋をしないのに自然に蓋が出来ました、佳「其れは貴様が蓋をしたのを忘れたのだ、何でも宜いから此方へ早く持つて來い……煽げ、静に煽げ……。辨「畏まりました、此の炭は熾りが悪くつて誠に困る、狸「納所、辨「お呼びになりましたか、佳「呼びはせん、辨「デモ納所といひました、佳「氣の故だ、狸「納所、辨「マ、お呼びなさいましたか、佳「呼びはせん、辨「ハテ誰だらう、狸「納所、辨「何だ、納所なんといふ名ではない、辨「辨長といふ名だ、狸「納所尻が熱い、辨「マア、マア此の釜は口を利きます、佳「釜が口を利く奴があるものか、辨「其れでも今、納所尻が熱いと云ひました、佳「馬鹿を云へ、さうバツバツバと炭を立て、は可かん、そんなことで火が熾るものか、只煽ぎさへすれば宜いと思つて……。斯ういふ工合に煽ぐんだ、狸「住持、佳「コレ辨長、貴様造り聲して、住持と申したな、辨「イエ、そんな事は

言やア致しません、全たく釜で住「釜が住持などいふものか……、ア、其方が粗  
 勿な水の入れやうをしたから、蓋に水が溜つて居て、其れが火の中へ落つて、チエーと  
 言つたのが住持と聞えたのだ、狸「住持 住「ヲヤ不思議だな、狸「住持尻が熱い、住  
 は不思議だ、辨長全たく釜が口を利く、辨「ソレ御覧なさい、餘ッ程不思議でござい  
 ます、住「構はないから一「生懸命バツパと煽げ、狸「住持尻が熱い、納所尻が熱い、住  
 持尻が熱い、納所尻が熱い……、住「ア、飛び出した、早く行つて見ろ……  
 どうした〜、辨「へエ、椽の下へ入りました、住「ナニ椽の下へ入つた、辨「へエ、釜  
 ぢやアございませぬ、此の位ゐの小狸でございます、住「ハ、ア道理で半金騙られた  
 辨「其れだから包んだ風呂敷が八丈でございます。」



柳亭左樂

相變らずまた那の話かとお叱もございませうが、  
 併し演る本人に依りまして、幾分か變つた所がムいますから、其變つた所で御覽を  
 願います。落語でも講釋でも芝居でも、どうも御婦人が入つて居ないと、何となく色  
 氣といふものに乏しい、其中でも落語となりますと、どうしても御迷惑ながら御婦  
 人をお借り申さないと面白味が薄いやうな考へがムいます。貴人方には然んな事は  
 ござんせんが、兎角中から以下、我々社會杯になりますと、一軒の家で内儀さんが  
 御亭主の名を呼んで居ります。どうも之は工合が悪いやうでございます。どうして  
 も御家内といふものは、幾ら権力があつても、御亭主より一步下に退らなければな

らないもので、御亭主の名前を呼ぶよりは、矢張り貴所とかお前さんとか云つた方が、體裁も宜し、お色氣もあるやうに思はれます。尤も世間に能くある、内儀さんが一生懸命働いて居て、御亭主が遊んで居る。誠に結構な事でございますが、どうも内儀さんが働くとなると、俺が働いて亭主を食べさせるといふ奴が鼻の先へぶら下つて見える、働くべき亭主が遊んで居て、内儀さんを働かせるのだから其は威張られても仕方がない道理でございますが、他人の目から見ると何だか外見ないやうでございます。〇「ナニおきさんが来た、サア〜此方へ通しな……イヤ之は之は、どうしたい、十日はかり見えないから、どうしたかと思つて案じて居た。イヤナニ御無沙汰はお互えの事だが、好い鹽梅にお華客さまが一日増しに増るさうで、誠に結構だ。昔の人は旨い事を云つたね、稼ぐに追附く貧乏なし、何でも人間は稼ぐに越した事はない、只困るのは、どうも子供が出来ないのが一番瑕だ、子寶と云つて、何でも夫婦の間には、子供といふものを舉げて置かなければ、家も旨く往か

ず、第一國へ對して濟まない、假令女の子が出来ても、成人をして之が他へ嫁さ。又男の子を生むといふやうな事で、決して女だから往けない、男だから宜いといふやうなものではない、何でも宜いから早く子供が出来れば宜いが、どうしたい大分顔の色が悪い、風邪でも胃きなすつたか きん「イエさういふ譯ぢやアございませんが、旦那に少し御相談があつて伺つたんでございます。〇「ナニ相談に、然うかい、何だい改まつて相談ツてなア きん「外ぢやアありませんが、何日でも面倒な事が出来ますと、旦那様に御迷惑を掛けまして誠に濟みませんがねえ……オヤ〜マア此の猫は、先達て私がお世話をした那の猫でございませるか、マア大層大きくなつたぢやアございませんか、マアお髯などを附けて、大層目尾が上つて……〇「おきんさん、相變らず戯談ばかりいふね、猫、目尾の下つてるのを見れば事はない、併しお前さんが家へ來ると、何日でも話が賑やかで好い心持だ、何だい其の相談ツてなア きん「イ、エ夫の事なんで。〇「ウム きん「貴郎が夫婦にして下すつたので、マア

私も今日まで我慢して居りましたが、逆も見込みがございせんから、どうか旦那  
 私は別れて了はうと思ひますから、何にも仰しやらずに別れさせて下さいまし……  
 ○「又初めたのか、どうもお前所みたやうに夫婦喧嘩をする者はねえもんだ、近所  
 の噂さでも、毎日一遍づつ、髪結のおきんさんの所では夫婦喧嘩をするといふ位の、  
 直に別れるの放れるのといふが、其も今いふ子供が無いからだ。昔の人の譬にも、  
 夫婦喧嘩は犬も食はない、此の位の詰らないものはない、私もモウ年を老つたお蔭  
 に、世間からも種々の話を持込まれるが、纏める事はあるが、打毀すといふのは誠  
 に仕悪いこつた、マアどういふ理由だか、其の理由を一通り話をしなさい きん「ハ  
 イ、旦那の前でございしますが、妾が一生懸命稼いで居りました家の人は何一ツしま  
 せん ○「サア其だ、私が例も云はうと思つてるのは、マア世間では亭主が働いて、  
 内儀さんが家内の事をするといふのが普通だ、其をマアお前が、稼業とは云ひなが  
 ら一日外を駆摺り廻つて働いて居る、亭主は別に身體に不足もねえ癖に、好い腕を

持つて居ながら些とも稼がねえで、講釋場へ行つたり、活動寫眞へ行つたりして遊  
 んで居る。詰りお前が稼ぐから、其を的にして怠けるんだが、其の代り又お前が、  
 自分が稼ぐといふ事が鼻の先にぶら下つて居る、私が稼いで良人を食はして居ると  
 いふやうな様子が顔に見へる。マア家の内儀さんも聞いて居て餘り快い心持もしな  
 からうが、女の伶俐と男の馬鹿と附替ふといふ位の、幾ら伶俐でも女の伶俐は高が  
 知れて居る。其をお前が亭主を食はして置くといふのを鼻に掛ける。其が詰り亭主  
 の氣を逸して、遊ばせる原因になるのだ きん「さう仰しやればさうかも知れません  
 が、私が一日仕事をして歸つて來ます、モウ貴郎薄暗くなつて居りますのに、燈火  
 も点けないで、寝轉んで新聞の夕刊か何か讀んでるんでございます、能く讀めると  
 思ふ位で……私がお前が遊んで來た譯ぢやアなし、働いて歸つて來たんだから、燈火位  
 ら点けて、お飯の支度をして置いて呉れても宜さそうなものだと云ひますと、何も  
 俺は奉公人ぢやアなし、歸り早々叱言を云はねえでも宜いと、ブツ／＼云ひながら

御膳拵へをして、お飯を食べて了ひました。さうすると衣類を着替へて、何處かへ出掛けやうとしますから、お前さん何處へ行くんだ、又遊びに行くんだらうといふとナニ商賣の方の寄合があつて行かないやアならないと云ひますから、冗談云つちやア往けない、お前が以前の通り仕事でもして居たら兎も角も、仕事をしないで仲間の寄合などに行かないでも宜いといふと、何でも行つて来なけりやアならない。其ちやア餘り更けない内に歸つてお呉れ、九時頃には歸つて来ると云つて出掛けました。九時が十時になつても、十一時になつても歸つて来ません、時計は遠慮がないからズン／＼廻つて了ひます。今に歸るだらう／＼と思つて、昨夜透々終夜寝ずに了ひました。スルと今朝八時頃になつて茫然歸つて来ました。私は口惜くつて／＼毆つてやらうかと思ひましたが、苟且にも亭主になつて居るものを、毆つては悪いと思つて私が我慢をして了ひました。○「ウム、きん」さうすると貴所、體裁が悪いもんでございますから、何だか私にお世辭などを使つてるんで、其から一本さ

う云つてやりました。昨夜歸らなかつたのは、又女郎買に行つたんだらうと云ひますと、ニツコリ笑つて……旦那様の前でございますか、オホ、此んな事を云つちやア誠に濟みませんけれども、アノ良夫がニヤリと笑つて容姿が、誠に好いもんでございますから。○「戲談云つちやア往けない、今夫婦別れをしやうといふのに何も惚言などを云はねえでも宜い、其からどうしたい、きん」さうしますと貴郎、お前といふ結構な女房があるのに、何も女郎買などに行つたつて滿らねえちやアねえか、俺アお前といふ噂アがあるから、遊びになんぞ行かねえと、斯う云はれて見れば、何も私も厭な心持は致しません。○「ウム、其なら其で宜ちやアないか、きん」所がマア聞いて下さいまし、御飯を食べて、湯に行つて来ると云つて衣類を着替へて出掛けて参りました。跡で其の脱いだ衣類を疊まふと思つてへ袂へ手を入れて見ると中から書附が出ました、何だと思つて擴げて見たら、これが女郎屋の受取ちやアありませんか敵娼が千鳥さんといふんで、勘定が一圓三十六錢、呆れ返つちまふちや

アありませんか。其の女郎屋は何處だと思ふと、洲崎の井筒樓といふもので平常から聞いて居りましたが、那處の女郎衆は、大層勉強するさうで、サアムラ〜して居る所へ歸つて來ましたから、突然一ツ毆つてやりました。スルト良人が驚ろいて何だつて人を打つんだ。何だもないもんだ、女郎買に行つたらうといふと、お前といふ女房があるのに、然んな所へ行くものかなんて人を欺して、此の書附は何だつて、何ば何でも口惜うございますから其から撈り附いてやりました處が、お隣りの佐吉さんが來て止めましたんで、私も佐吉さんの顔に免じて勘辨して、其場は笑つて濟せました。〇「ウム、きん濟ませる事は濟せましたけれども、どう考へても旦那様の前でございしますが、女房が亭主に惚れて家内安全、亭主が女房に惚れて家内安全。其を私ばかり惚れてたつて、先方で惚れて居なかつた日には、圓く行く譯はありません、那奴は些とも私に惚れて居りませんよ。〇「成程、其やアお前の云ふ所は一理ある、女房が亭主に惚れて家内安全、亭主が女房に惚れて家が圓く治る。

夫を女房ばかり惚れて居た日には、旨く往かないのは道理だが、併し私の考へでは亭主はお前に惚れて居るよ、きん「イーエ、些とも惚れちやア居ません。〇「惚て居ないといふのは、お前の心に疑ひがあるからだ、といふのはお前も未だ真正に、公然夫婦といふ譯でなく、マア内縁の妻といふやうな事になつて居るんだから、亭主が浮氣をしやアしないか、捨てられやアしないかと、一々お前が疑つて變な事をいふので、先方でも面白くない事があると、直に女郎買などに行く、何でも此の人は私ので、亭主だ、とお前の方で堅く思つて、とらん、先の惚て居る事が分る。きん「貴郎はさう仰しやいますけれども、惚てる位なら何も女郎買などに行きやアしません、惚て居ないから遊びに行くんぢやアありませんか。きん「さうお前が思うなら、一番好い話がある。惚て居るか惚て居ないか、一ツ試してみたら宜からう。きん「さうですわね、聞いて見るんでございますか。〇「聞いて見たつて分りやアしない。お前の御亭主は、何か種々な道具などが大層好きだね。きん「ハイ、私には分りませんけれども



瀬戸物や何か大層好きでございまして、お金も無い癖に止しやア宜いのに、此間も日本橋の仲通りで、南京のお皿とかいふ汚い濫の附着いて居るお皿を買つて来て喜んで居りましたが、古い物を集めるのが好きでございまして。○「ちやア斯うおし、今日はモウ半端になつたから、一日遊んで了ふさ。偶には機械だつて油を注がなけりやア廻りが悪い、人間も働けばかりが能ぢやアない、少しは身體を休めなけりやア往けないから、マア悠くりおし。婆さん、何かお茶菓子はないか、私が今他で聞いて来た面白い話をして聞かせるから。きん「ハイ有難うございまして。○「お前さんなんざア諸方様へ出入をして居るから聞いたかも知れないが、確か論語といふ本の中にある。厩焚たり、子、朝より退いて曰、人傷へりやと、馬を問はず、といふ事がある。きん「ハイカラ節でムいますか。○「ハイカラ節ぢやアない。唐土といふから今の支那だ。ソレ二十七八年に日本と戦争をした國だ。きん「ア、其ぢやア南京さんの事でございましてか。○「さうだ、マア此方の事に比べて見ると、結構な官員さんで、

馬車に乗つてお勤めになるやうな方だ、此のお方がお勤めになつた跡で厩から火事が出て、馬が焼死んだ、御家來が御留守中に疎勿があつて面目ないと云つて、早速其の次第を申し上げたから、殿様がお屋敷へお歸りになつた。御家來がどうも誠に面目ないと云つて酷く濟まながつて居るのは、火事を出したばかりではない、馬を焼殺した、殿様が平常から大層馬がお好きで、御家來に向つて、馬は畜生で口も利けず、誠に不愆なものだ、能く目を掛けてやれ、疎勿があると其の分には許さんぞと云ひ聞かしてある。其の馬を二頭焼き殺したのだから、殿様へ對して申譯がない。スゴく御前へお詫に出ると、一番先へ汝等怪我はないかとお尋ねがあつた、一同の者涙を溢して喜び、手前共一同に怪我はございせんが、厩から出火致し、御秘藏の馬を曳出す暇もなく、二頭ながら焼き殺しましてございまして。何とも申し譯がございせんかと、お詫をすると、お前達に怪我のなかつたのは重疊である。馬が二頭焼け死んだか、不愆である、葬つてやれ。と人の方を先へお尋ねになつて、跡

で馬の事を仰しやり、別にお叱言もない。どうも有難い事だと家來一同喜んで、其なればこそ一層忠義を勵んだといふ。其と反對の話がある。横濱の或る金持の旦那で、大層骨董物がお好きだ。きん「骨董物とは何でございます。〇」お前の御亭主見たやうに、古い道具が好きなんだ。或る道具屋から買った、和蘭陀の鉢、何でも二百圓ばかりしたものださうだ。きん「マア二百圓の鉢と云つたら、大層大きなものでございませうね。〇」イヤ別に大きくはない、二百圓は愚、五百圓も六百圓もする品がある。或一日の事、お客様がお出でになつた。御亭主が自慢で其の器を出して御覧に入れ、御客様が歸つてから御自分で布へ包み、箱へ入れて御新造に、奉公人の手に渡して疎勿があると往けないから、お前藏つてお呉れ、畏まりましたと御新造が、大切に持つて奥の土藏へ藏ひに行つた時に、どうした機會か御新造が土藏前の板敷でツルリ返つて轉んだ。ガタ／＼と音がしたので、驚ろいて旦那が其所へ飛んで来て、どうした、ツイ過失つて迂りました。鉢を毀しやアしないかと突然鉢の事

を聞いた。御大切のお品なでございますから、轉びながら、確かり持つて居りましたので、宜い鹽梅に毀しませんでございました。さうか、其やマア宜かた。其の鉢を毀はしちやア大變だと思つた。お前何處か痛めやアしないか。イエ少しばかり打ちましたいけで……。さうか、氣を附けなくつちやア往かねえ、と云つて其の日は濟んだ。三日ばかり經つと御新造が、旦那様、一寸實家方へ用事があつて行つて參ります。ア、行つて來なさいと、何の氣なしに出しておやんなさると、此の御新造が實家へ行つてお父さんに此の話をしたから、大變に阿父さんが腹を立つて假令其の鉢が一萬圓二萬圓しやうとも、人の身體より大切といふ事はない。娘の身體を道具と一緒にされては堪らないと、早速媒妁人を呼んで離縁を申込んだ。云はれて氣が附いて種々詫をしたが、肯入れない。遂々離縁を取つて了つたといふ話がある。お前之から家へ歸つてやつて見なさい。瀬戸物が好きといふのが幸ひだから臺所の上蓋を態と外れるやうにして置いて、お膳の上か何かへ瀬戸物を載けて臺所

へ行つて、板の間を踏み外して竈の角へでも叩き附けて、瀬戸物を打毀して見なさい。亭主が何といふか、お前の身體を聞かないで、瀬戸物の事を先へ聞くやうなら眞實お前のいふ通り惚れて居ない。突然お前の身體を聞いたらば惚れて居るんだから、マア、我慢をしなさい。きん成程宜い事を伺がひました。有難うございます早速家へ歸つてやつて見ませう。お邪魔をして済みません、何れ結果は號外で……

○「生意氣なことを云ひなさんな……」

夫「何處へ行つたと思つて心配して居たんだ。仕事にも行つた様子でもなかつたなきん一寸用達しに行つたんだよ。何も心配する事はないぢやアないか 夫「心配しやアしねえけれども訝しいからよ。……何だ台所の上蓋などを外して、未だ飯を食ふ時刻ぢやアねえ、膳などを持出してどうするんだ。オイ、さう瀬戸物を持

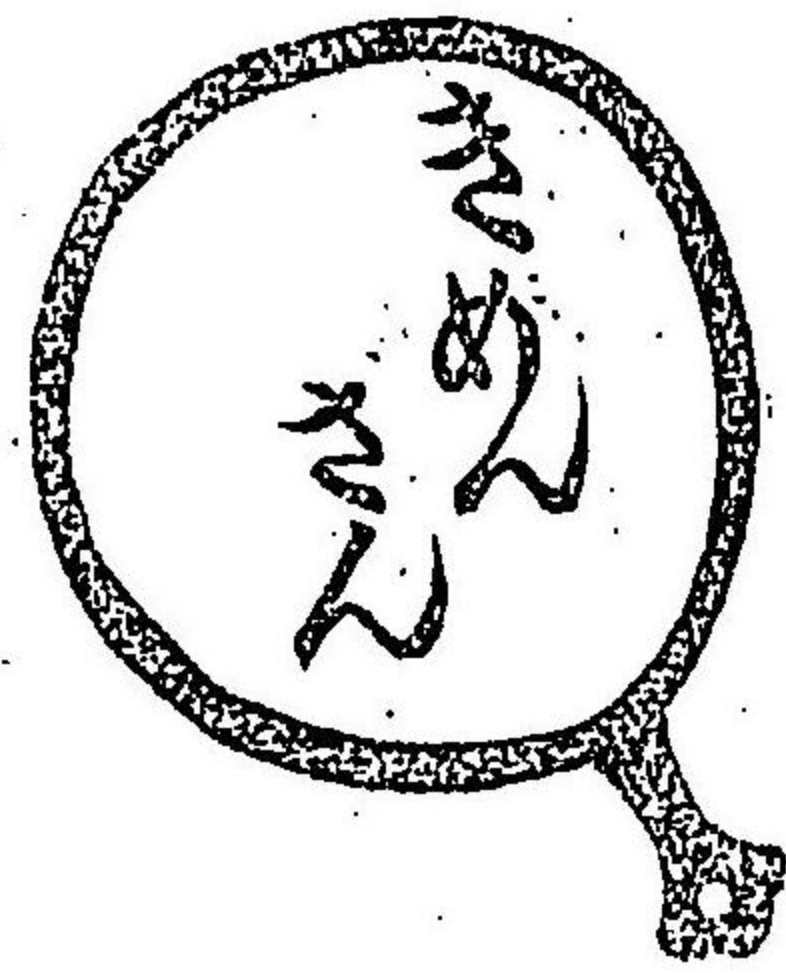
出して列べてどうするんだ きん「マア宜いんだから黙つてお在よ」内儀さんは固より打毀して、御亭主の氣を試さうと思ふんだから、有つたけの瀬戸物を残らずお膳の上へ載けて臺所へ出ると、態と迂らして置いた揚げ蓋の上へ乗かつて、竈の角へ



お膳を叩き附けたから、ガタンガチャ〜〜 夫「どうした〜、怪我をしやアしねえ」

か きん「マアお前さんの大事にして居る瀬戸物を皆な此んなにしちまつて、濟まな  
 い事をしたね 夫「申戯ぢやアねえ、滿らねえことをいふな、然んな物は幾らでも錢  
 を出しやア買るんだ。汝身體を何處か痛めやアしねえか きん「アラマア眞正に一寸  
 嬉しいぢやアないか、今まで疑つて居たのは勘辨して頂戴、瀬戸物は何んな大切な  
 ものでもお錢を出したる買る、身體を痛めたら取返しが附かないつて、マア柔い  
 心持だね、眞正に何てえ間が宜いんでせう。お前さん厩の殿様だよ 夫「何を云やア  
 がるんだ きん「厩焚たつたらう、朝より何とかして、馬を問はずつて都々逸があ  
 るだらう 夫「然んな都々逸は知らねえ きん「眞正に嬉しいぢやアないか、お前さん  
 私の身體が然んなに大切かい 夫「汝が怪我でもして休んで見ねえ、俺ア遊んで、食  
 へねえ。

先代  
 ●左 樂 落 語 會 郵 税 共 金 廿 錢



古今亭しん馬

道樂といふ事を能く申しますが、道樂とは  
 道に樂しむとか文字で書くさうで、此の道に  
 樂しんで在つしやるお道樂は極宜しいもので  
 中には道に落ると書く道樂があるさうで、之  
 が宜しくない。お芝居なら芝居、淨瑠璃なら  
 淨瑠璃、見て樂しみ、聞いて樂しんで在つしやるのが之が眞のお道樂、處が役者と  
 いふ者は樂なもの、綺麗にして居て、娘子供に大騒ぎをやられて宜いものだ、乃  
 公も役者にならう、と來ると、之が道に落る道樂なのださうで宜しくございません  
 けれどもお若い中はツイ其踏迷うのでございませぬ、お女郎買ひなども、心して程宜  
 く遊んで居れば、一夕の榮華に千歳を延ぶるといふ誠結構なもの、度外に遊ぶと  
 いふは往けないと知りつゝお若い中は、ツイ初會から娼妓に舌の長い事でもいはれ  
 たり何かすると、食過たれの角兵衛獅子見たやうに歸る事は全然忘れて了つて、斯

うなれば仕方がない、角の地面でも賣つて了はふといふ。御自分の地面ではない、阿父さんの地面ですから遠慮なくお賣りになる。阿父さんの方でも、彼れでも宜い、是れでも宜いと、幾ら可愛い子供でも打捨つては置けない。親類に相談の上、只今なれば長男除きとか廢嫡、其昔しは勘當、例の御帳に付けるといふやつ、御當人は夢中だから何とも思はない。儘にしやアがれ、動ともすると勘當々々と、何だ、人に揉れなげりやア往けないといへば、淺草の市へ行って是だけ揉れ、ほ澤山だらうといふし、世間を見なければ往けないといへば、九段坂へ登つて、江戸中を見たから確かだといふし、勘當といへば驚ろくと思つてやがる、花魁がさう言つた、若旦那勘當されて來なまし、お前はんが勘當されるやうな事があつたら、失禮だが揚屋町の振裏邊りへ男妾にして置いて、鯛と玉子の暴れ食をさせるといつた。其方が餘程樂だ、ア、勘當がされられたいなんで、滿らないものを志願して居る、真正に勘當をされた時に先方で言ふやうにして呉れ、ば宜いが、さう旨くは往きません。御當

人は夢中だから、米の飯と天道様は付き物だといふやうな顔をして居る、阿母さんは甘いから裏道を二三町追駈けて來て、「お前半抱しなくちやア往けませんよ、當分困ると往けないからお小遣ひだよ」と女夫巾着の儘、二十兩とか、三十兩とかいふお金を呉れる。涙の出るやうなお金だ。尤も此のお金は此の息子さんが取らなければ、口前の旨い寺の和尚でなければ出ない金。其のお金で一商法といふ思召しでもあるかといふと固よりさういふ人間だから、そんな考がへはない、只今なれば車ですが、以前の事ですから長岩江戸勘とかで、吉原へ三枚で飛ばして、藝者精間を上げて、言葉が洒落たものだ、考今親父に勘當されて來たので、目出度い祝ひを「しやう」此間或方に伺がいましたが、勘當といふものは、餘りお目出度いものではないさうで、どう戸迷ひをしたのかお祝ひをする。精四若旦那、御勘當結構……」入つて來る奴が善玉はございませぬ、悪玉ばかり、お金を使つて了つて、モウ此お客は駄目だとなると、古い川柳に「精問鉦を敲いて陣を布き」親よりも先きに見限

る幫間』など、いろく悪口を言つてあります。又都々逸に『女郎の誠と玉子の四角あれば晦日に月が出る』といふ、眞逆女郎だつて木石ではなし、そんなに不實なのばかりもございませぬ、自分ゆゑに失錯たかと思ふと、なげなしの部屋着の一枚二枚は脱ぐかも知れませんが、さうなると内所で承知いたしません、花魁の爲にならない、直ぐに茶屋へと、仲の町へ人が来る、お茶屋でも迷惑筋、迎ひに行かない譯に往かないから『若旦那、餘り長逗留ちやアございませぬか、一旦御旅宿へ……』と茶屋へ退つて、一口氣の變つた所で出すのが極つて居る、夏なら奴豆腐、冬なら湯豆腐で追つ拂ふ、二度目は金を持たなければ入れない、ソコで親類縁者の所へ行くと爪弾き、何れ詫言の時に口を利いてやらうと、敬して遠ざけられる、二進も三進も行かなくなつて、ア、悪い事をしたと、今更後悔しても往けない、さうなつて来ると業病で、色里のお土産が洩騰する。那れが又人の盛り時には出ません、手ごちにおゐない時に嘔き出す、サアどうする事も出来ない、トッの詰りが頭

の腦天へ穴が明く其位はまだお格好だ、一番情けないのは顔の心棒、鼻の障子がなくなります、只今は検査をするからさういふ事がないが、鼻の障子がなくて夏座敷、或は夏景色、春景色は清元の梅の春だが夏景色の顔などは餘り嬉しくございませぬ、併し斯うなると辛抱いたします。甲「どうだへ一晚行かふか 乙「往けねへ……甲「交際ねへな 乙「モウ懲々だ」鼻くたになつてから懲りても追付かない、出入の職人の家へでも食客といふ事になる、食客といふと體裁が宜いが、早くいふと居候、遅くいつても居候ですが、どういふものか川柳と居候とは仲が悪い、敵のやうだ、『居候三杯目にはそつと出し』惡どいのは『居候出さば出る氣で五杯食ひ』又『居候晦日の朝蕎麥を食ひ』居候骨抜に勞食つて居る『居候嵐に屋根を這ひ廻り』居候兒とはころび取換へる『居候たばといふ字を避けて喫み』居候粉ばかり搦つて喫んで居る』俗に居候置いてもあはず居てあはず、是は置いては合ひますまい、困るのは居候の方に権識のあるのです、出店迷惑付けの居候、誠に之は困りますな 圭お

前のやうにさうがみくいつたつて仕様がねへちやアねへか、外見ねへ、店もあるちやアねへか、少し静かにするが宜い、妻、静かにしろつたつて、私だつて何も言ひたい事はないが、お前さんが彼人の大先生に、そんなに御厄介になつたか知らないが、大先生は大先生さ、若先生もないものだ、紀綿さんを御覧なさい、呆れ返つて物がいへないよ、妻、さうお前のやうにいつたつて仕様がな、さういふ人間だから親達だつて愛想が盡さるんだ、親にせえ見限られる人だもの、大先生には幾らか乃公もお世話になつたから、其萬分ケ一でも御恩返しと思つてるが、さうがちくちくつちやア困るぢやアないか、妻、私だつて言ひたくはないが、如何にも無精だよ……、妻、仕方がないよ、家に居れば箸と筆より重いものを持た事のない人だ、お前のやうにいつたつて仕様がな、妻、お前さんが其んなに居候の肩を持つんなら、私を出て行かふぢやないか、妻、仕様がねへな、女房を出して居候を置くといふ馬鹿な話しはねへや、一體どうしたといふんだ、妻、私はそんな無精な居候を置いた事はないよ

此間も此間だ、お湯に行けば長い湯で、茹つて居るやうだよ、其れから此間二階の物干へ番傘を乾して置いたら、物干でドン／＼音がするので、何だと思つて上つて行くと、乾して置いた、番傘を引つ擔いで、見得をして芝居をして居るのさ、世間へ外見ないよ、夫に萬年青の鉢を蹴落して、往來の人の頭へモツ少して打付る所、夫から裏の小母さんの所へ用があつて、御飯が焚付けてあるから、一寸濟みません若旦那、竈の下をお頼申しますといふと、不承／＼に立つて来て、用が濟んで歸つて来ると、煙くつて入れないぢやアないか、若旦那どうしたのですといふと、此んな意地悪く燃えない薪はありませんといふから、そんな譯はないと見ると、シメジメ湿つてチユーブウいつて燃えないから、外へ投り出したら二本に折れて、見ると椽の下へ入れて置いた午莠を焚べて居たのよ、午莠と間違へる奴もないぢやアないか、妻、マア分つたよ、何所へ行つた、湯にでも行つたのか、妻、まだ寝て居るのさ、妻、まだ寝て居るのか、驚ろいたね……、お前奥の小母さんの所へでも行つて遊んでお出

で、煙草を持つてお出で、お先煙草は往けないよ、裏に出たら井戸端で饒舌んなさんなよ、お前が一番金棒引だといふ評判だから……ア、忌だ、嫌はがア、いやアがるし、二階ちやア悠々とまだお寝みか、暢氣なものだ……若旦那、若先生……若ア、忌だ、居候などは孫子の代までさせるものぢやアねへ、今嫌が頻りに何にかガア、いつてたが、牝鶏勸めて牝鶏時を告るといふのは是だな、喜兵衛も中々伶俐な口を利くが、嫌には惚いなア、へ、へ、二本棒の鼻垂し、喜何かブツ、言つてるよ……誰が二本棒なのですえ、若聞えたかへ、油断も透もならないな、喜降りてお出でなさいよ、若只今下ります、喜貴所寝て在つしやいますの、若寝ては居ないよ、喜起きて居るのですか、喜起きて居ると判然ともいへない、壁へ足を付けて横に立つてますよ、喜起きないと突つくのを知つてるから時々寢床を取換へる、今は辰巳の方へ當つて寝て居る、喜冗戯いつちやア往けません、早く降りてらつしやい、若只今下帯を探して真最中、喜汚ないなア、何處へ置たか分りませう、若それが暗闇だから、何處へ投つたか分りません……有難い、分りました、住所は確かに分りました、喜早く降りてらつしやい、若今裏表を檢ためる……喜冗戯ちやアない早く降りてお出でなさい、若何か急用かへ、喜一寸お話しをしたい事がありますので、若急用なら君の方から昇つて来た方が早いだらう、喜冗戯仰しやいますな、早く降りてらつしやい……若旦那、さう階子をドン、降りなされるな、隣りにも人が居ますから……マア顔を洗つてらつしやい、若先生顔を洗つて、手を合せて拜んで居る、喜何所を拜んでらつしやいます、若お天道様を……喜お天道様はモウ貴郎の頭の上ですよ、若一寸お留守見舞に、喜若旦那此所へ入つしやい、若さてお早ふ、喜何です、若お早ふ、喜貴郎何時だと思つてらつしやる、若お前が私に何時だと聞くがお前は今まで寝て居たかへ、喜私は今朝用達しに行つて今歸つて来たのでサア、若起きて居るものが、寝て居るものに時を聞くとは是如何に……喜問答だね、冗戯ちやアありませんよ、私も度々の事で、此んな事は

ませう、若それが暗闇だから、何處へ投つたか分りません……有難い、分りました、住所は確かに分りました、喜早く降りてらつしやい、若今裏表を檢ためる……喜冗戯ちやアない早く降りてお出でなさい、若何か急用かへ、喜一寸お話しをしたい事がありますので、若急用なら君の方から昇つて来た方が早いだらう、喜冗戯仰しやいますな、早く降りてらつしやい……若旦那、さう階子をドン、降りなされるな、隣りにも人が居ますから……マア顔を洗つてらつしやい、若先生顔を洗つて、手を合せて拜んで居る、喜何所を拜んでらつしやいます、若お天道様を……喜お天道様はモウ貴郎の頭の上ですよ、若一寸お留守見舞に、喜若旦那此所へ入つしやい、若さてお早ふ、喜何です、若お早ふ、喜貴郎何時だと思つてらつしやる、若お前が私に何時だと聞くがお前は今まで寝て居たかへ、喜私は今朝用達しに行つて今歸つて来たのでサア、若起きて居るものが、寝て居るものに時を聞くとは是如何に……喜問答だね、冗戯ちやアありませんよ、私も度々の事で、此んな事は



言ひたくないが……若さうだらう、私の方も聞きたくない、喜私が今用達しか  
ら歸つて来ると、薄々お聞きなすつたか知らないが家のお多福がいる〜のこ  
ね……若お言葉中だかお多福とは誰だへ、喜家の嫁ア、若それがお多福かへ……  
…君はお多福といふのを知らないね、お多福といふのは細女命の事で、愛嬌のある  
可愛らしい胖した顔をお多福といふ、君の家のは忌に尖がらかつて角張つて居るよ  
それは出高福といふのだ、喜冗戯ちやアありませんよ、若私も言ひたくはないが、  
序でだからいつて聞かすのだ、お前は那の妻君を宜いと思つて添て居るかへ、悪い  
と思つて添てゐるかへ、喜何だ意見が反對になつて了つた、若序だからいふのだが、  
それは根性の悪い變な人間です、全體お前の妻君の鼻は何日胡座をかいたのだい  
喜大概におしなさい、若只聞くのだアね、胡座をかいた鼻といふはあるが、お前の  
妻君のは、寝轉んで足を二本出して居るのだ、失敬な鼻だよ、頬邊が出て中が凹ん  
で鼻の穴が仰向けに寝て居る、何の事はない、古い薪割臺へ里芋を投込んだやうな

面だ、喜何時も家の奴がガアガアいふのを聞くのが辛い、大先生に御厄介になつた  
から其御恩返しと思つて斯うして居ますが、貴郎に何も水を汲めとか何をしろとか  
言つたつて、其れは無理な話したが、若喜兵衛さんの前だが、私は水を汲めんとは  
言ひませんよ、汲みますとも、併し妻君のやうにされては、腹が立つて水が汲めな  
いね、此間の朝私起きて、顔を洗はふと臺所へ来ると、手桶の中へ柄杓を入れて  
搔廻して居るのだ、何をして居るかと思ふと、斯う忙がしい時には少し目配りして  
呉れさうなものだ、誰か水の一ぱい位の汲んでも宜さうなものだといふのだ、お前  
の前だが、誰かといつたつて誰が居るえ、お前が用達しにでも出た後は、活きてる  
ものは猫に私、何ば器用な猫だつて水は汲みますまい、其れよりは若先生一ぱい汲  
んで来て下さいといへば、二ツ返事といふが、私や一ツ返事で汲んで来るよ、其れ  
をそんなにははれると癪に障る、けれども私が行つて汲んで来ませうと、水を汲ん  
で来ると、今度のが悪い、古い味噌澁の中へお錢を入れて、ガラン〜ガラン、停

車場に行つたやうに振つて、板の間へトンと置いて、誰か豆腐の一丁位を買つて来て呉れさうなものだといふんだがね、誰かといつたつて誰が居るえ、猫と私………  
 喜分りましたよ、猫が豆腐買ひには行きやアしません 若、其通りだ、其れよりは買つて来てお呉んなさいといふが宜いぢやアないか、大體豆腐屋が来るのだから其時に買へば宜いのだ、モウ裏へ来る時分ですよといふと、裏へ来る豆腐屋は往けません、裏へ来るのは柔らかくて往けません、横丁のが固くて宜いのですといふのだがね、何所だへ妻君の國は、豆腐は柔らかいのを良しとして、絹漉が宜いといつて、買切れるのを知らずに根岸まで食ひに行くのだらう、妻君などは苞に入つてる豆腐が宜いのかしら、呆れ返るね、私を買つて来ませうと味噌漉を持って水汲下駄を穿いて、裏口から出掛けたがね表から出れば宜かつたに、裏から出たから悪かつた、裏の出口に近所の娘達が化粧をして遊んで居る、所へ味噌漉を提げて出るのは、餘り體裁が宜くないや、其所へ丁度豆腐屋が来たから買つちまつた、買てから、是は

往けないとは思つたが、モウ仕方がない、家へ歸るには時間が早し、其れだけの刻限を過ぎて歸らなければ裏で買つたのが露顯をすると思つて隠れた籠城は何所だと思召す 喜洗濯屋の小母さんの所 若、豈圖らんや 喜、美いちちゃんの所 若、左にあらずで……… 總雪隠へ入りましたよ 妻、汚ないね、豆腐を持つて 若、持つて入つちやア居られないやね 喜、預けたの 若、踏板的の傍に假置をしたね 喜、冗戯ぢやアないね 若、歸つて来ると、妻君の顔色が變つて私の顔と豆腐と見比べて居て、是は横町の豆腐ぢやアありますまいねと、一本トンと来た時は、ギツクリとしたね、イエ横丁の豆腐に相違ございませんといふと、イエ裏の豆腐です、



裏の豆腐と横丁の豆腐とはもみぢが違ひますといつた、豆腐だの南瓜の鑑定は上手なものだね、喜餘計な事をいふやうでございませぬがね、今日貴郎をお呼び申したのは、外ぢやアございませぬ、貴郎もお醫者様の息子ですから、骨折業の事を、ア、の斯うのといつたつて、其れは仕方ありませんが、何も思に被せる譯ぢやアありませんが、貴方も斯うやつて居た所で、果しの付く目的がありますまい、何か遊ばすといふ氣はありませんかへ、若されば、私も其邊を考がへないでもないがね、どうかしやうと思ふのだが、那も之もと考がへて思案が付かないが、マア私が望の口があつたら奉公でもして見やうと思ふがね、喜其口を探さうぢやアありませんか何も急ぐ事ぢやアありませんから、どういふ事をお望みで、若男妾の口でもあつたらばと思つて居るがね、喜冗戯も程になさい、若喜兵衛さんの前だが斯うしやう、私は今お前の所に厄介になつて居るが、お前と私とは昔しが昔しだから宜いさ、お多角の身になると、喜お多角とは何です、若お前の妻君さ、詰り食潰しが來て居ると

思ふだらう、ソコでお前は印判屋にしては店が廣過ぎます、品物が澤山あつて廣いのは宜いが、品物がなくて間口の廣いのは形が宜しくない、喜大きにお世話でさア、若夫で之を半分仕切つて貰つて、其所で一ツ商法をします、喜貴所がですか……、若何か資本の要らぬ商法をします、喜何を、若私だつて醫者の俸だ、易書を見る位は知つて居りますよ、其れで一ツ賣卜者をしやうぢやありませんか、喜出來ますかへ、若少し危ないがね……、マア大夫丈だよ、一ツやらうぢやアないか、喜何日かやらやりますな、若思ひ立つたが吉日といふから、直ぐやらませう、喜夫々道具もなぐちやア往けますまい、若道具は間に合せてやらうぢやアないか……、お前の臺を借りる譯に行きませんかへ、其の彫臺を……、喜之は要るもので往けませんよ、若机が一ツ欲しいね……、密柑箱があつたねへ、喜有りますよ、若二ツ貸してお呉れ、此上に白金巾を掛ければ机と見えます、マア店を半分貸しなさい、斯う屏風で仕切つて了ふと、夫から葎の簾があるから之へ看板をブラ下げると、算木筮竹天眼

鏡だか……筮竹のやうなものはないかね 喜ありませんよ 若魚串があつたね、五六本持つて来てお呉れ、夫から灰吹を洗つて、茶呑茶碗の中に旨く笹るから、其の中に笹めて中へ魚串を五六本投り込むのが筮竹、算木が欲しいな……家の妻君が摘食をするので、火鉢の抽斗に微塵棒が入つて居たから、那れを貸してお呉れ、之に墨を付けて算木にすると、退屈の時には食ふよ、天眼鏡たが、夜燈火を取る、那奴を貸さないかへ、何か易書のやうなものが欲しいね、雑誌か何かありませんかへ 喜本なんぞありやアしませんよ、此所に長唄の本ならありますかね 若長唄の本、結構、貸してお呉れ、此所へ積んで置きますよ、本がないと外見ないから……其所で済まないが看板を書いて貰ひたいのだ、お前は商賣で筆を持つのが旨いからね 喜何と書きますので 若人相手相墨色判断 喜名前は紀綿としますか 若名前は今晴明として置してお呉れ 喜兵衛さんも洒落者で、言ふに任せて書いてやつた。之をブラ下げて置くと、物見高いのか、見安いのか直きにやつて來ます 女御免

若ハイお出で……乃公の方が人氣があるな、姐さん何だへ 女先生、身の上を見て頂きたいのでございます 若何だへ 女身の上を 若其れは見ますが、貴方の身の上はどういふお身の上です 女身の上を見て頂きたいのでございます 若夫は見ますが、今の所はどういふお身の上です、精しくお話しなさい 女私の方から申しませんが、分りませんか 若其所は名人となると、お前さんの方からいはないと分らない 女では申しますが、手前は此の横丁に居ります子供衆を對手に稽古をいたして居りますもので 若成程三味線のお師匠さんですね 女母の申しますには琴は許しまで取つたものだから琴もやつたらどうだらうかと申しますのですけれども、私は面倒臭し、今やつて居るのが清元ですから、五もくの師匠といはれるのが忌ですから、其れでやつたが宜いか悪いか見て頂きたいのでございます 若分つた、今三味線をやつて居て、阿母さんが琴もやれといふので、清元と兩方で五もいといはれるのが忌だから、やつたが宜いか悪いかといふ事ですね……宜しい、

お年は、五十九でございます。若、お若いね、全たくの年がさうですかへ、鑑札面も何所までも十九ですかへ、女、左様でございます。若、宜うございます、十九と……十九なれば忽ち分ります、安心してお出でなさい、此所に易書があります、エ、と勸進帳、道成寺……めりやすか……琴をやつたら宜からうかどうかと……は往けませんね、能く言つた無理なこと、いふから悪いねへ、矢張三味線の稽古をして入つしやい、三味線の稽古をして居ると、人が借ん胴といふから、決して貸棹にしては往けません、心を太棹に持て辛抱が肝腎だ……どうだへ女は喜こんで歸つちまつた、喜、無理な事だの、借ん胴だの、口上茶番をして居るやうなものだね、馬鹿馬鹿しい、若、又来た、今度は年増だね、一寸小意氣な年増だ……貴郎は何でございます、身の上ですか、年、先生縁談ですがね、若、縁談ですか、見ませうどういふ御縁談です、年、今の縁談を見て頂きたいので、若、今までの所を言つて下さらんと、名人には往けません、年、言はなけりやア往けませんか、若、言ふ方が早い、何方

かといふと、年、實は私は此の横町に居りますものですがね、面倒臭く、愚圖々々家の人が言ひますから、併し家の親達は一旦行つたものゝそんな事はないと言ふんですが、寧ろ他へ行つて了はふかと思ひます。若、分りました、お年はお幾年です……年、二十歳でございます。若、御亭主は……廿一貴女が二十、お連合が二十一、廿歳二十一、廿一廿歳か……さうです、ねえ之で見ると和女の性は火ですな、年、火じやアございませぬ、若、マア火にしてお置きなさい、火にして置かないと都合が悪い、其所でお連合は水性だ、年、イエ水性ではございませぬ、若、マアさ、水性だ、水性にしてお置きなさい、水性にして置かなければ、都合が悪い、此の水の性が悪いね、鰻の水性だ、穴ツ入りの好きな性だ、さうするとお前さんがカツカと火で焼く、どうも水火の戦かひで、合ひませぬ、合はない位の恐ろしいものはありません、合はなければ商人だつて戸を鎖します、合はない坂に車を押す如しなど、申しますな、之は悪縁です、お年も若い事ですから、柳橋か新橋、葎町又は数寄屋町からでも襦

を取つて御覺なさい、堅い事をいつて居るよりは宜しうございますよ……オイオイ見料は二人前だから二十錢ですが、和女のことですから十五錢にして置ませう……

行つちやつた、旨いだらう 喜、往けませんねへ、何を下らない事をいふのです、那れは頭の家のお姐さんですよ、下らない事をいつて、子分衆でも来ると仕様がありませんよ、早く店を畳んでお

了ひなさい ○エ、御免なせえ 若貴郎は何んです ○身の上判断するつてえのは手前か、家の姐御を異ウま

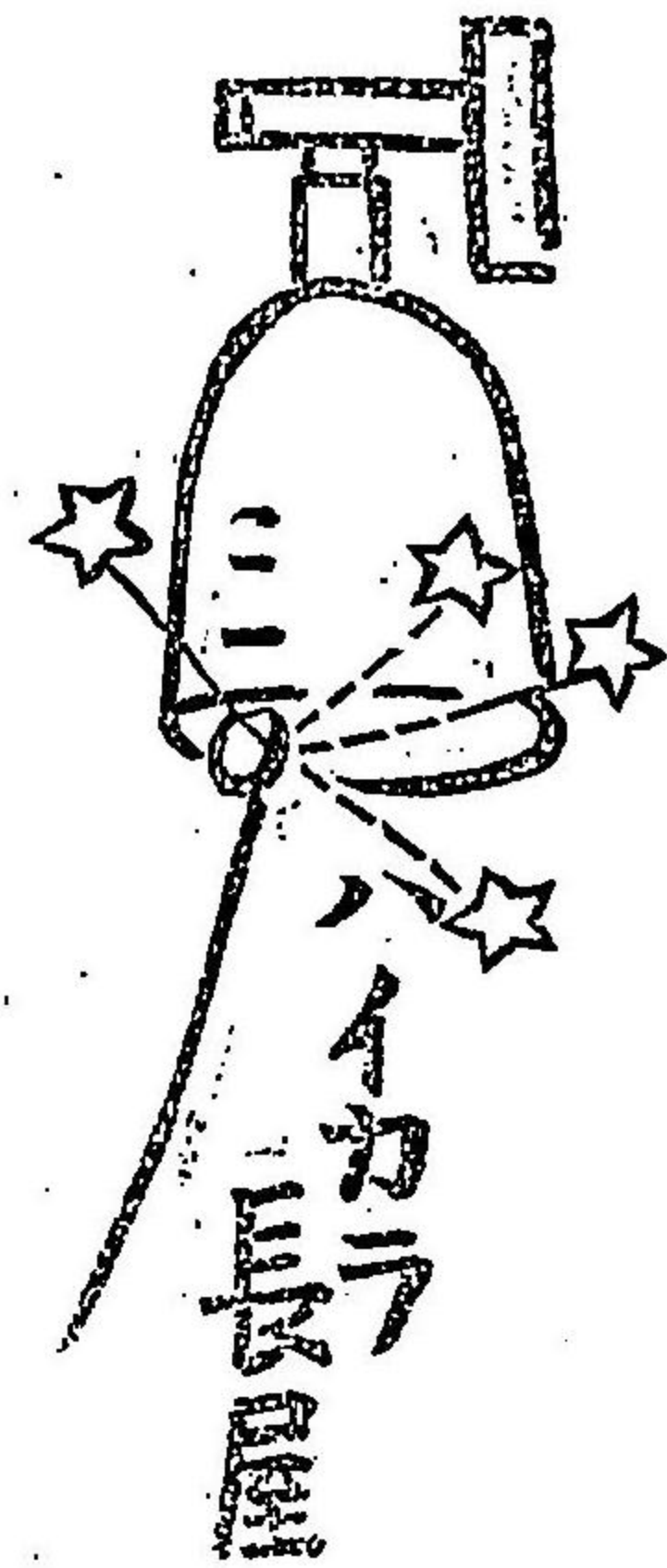


セツ返しやアがつたな若コレ、亂

暴な、殴つては往けない ○詰らねへ事をいやアがつたな、踏倒すぞ……若ア、痛い痛い、理不盡な奴だ、此んな大きな瘤を拵らへやアがつた……今度は醫者をしやう」と喜兵衛に相談をいたしますと、お醫者様の若先生だから何分か醫者の出来るものと思ひまして、喜ぢやアやつて御覽なさい」之から又看板を掛けて当期施療、施しに診察するといふので 女「御免下さい、お頼み申します 若何だへ……女「貴郎が御當家のお醫者さんでございますか 若まだ年が往かないから、玄關を開いた所が往けないから、今の中は施しに見て居る 女「誠に恐れ入りましたが、見て頂きたいものですが 若エ、見て上げますよ……何です病氣は 女「左様でございます、下腹が張りまして、腰が釣て往けませんので 若ウム、夫は疝氣だよ 女「へエ 若疝氣だよ 女「疝氣は男の 若男でも女でも疝氣だよ……橙の粉に木天蓼を括めて居れば宜しい……オイ、只歸つちやア往けないよ、五錢置いてお出で 女「あの施し…… 若施しだよ、だから五錢置いてお出で、昔の施しと今の

施こしとは違ひます……旨いだらう五錢……喜お止しなさいお前さん、女を捉まへて疝氣だなんて、女の方は寸白ですよ。若成程、お前醫者をやつたね。喜やもなくつても知つて居まさるね、夫に施しといつて五錢取る人がありますか。男頼み申します。若喜兵衛、お前出てお呉れ……マア出てお呉れよ。喜入つしやいまし、何でございます。男手前は藏前の萬屋から参りましたもので主人が先達てから風邪をこじらしたやうな氣味で難澁いたします、即刻お見舞を願ひます。喜左様でございますか……藏前の萬屋から、主人が風邪をこじらした氣味で寝て居るから、お見舞をといふのですがね。若行きませう。喜先刻の疝氣と寸白の様子では險呑だからね。若大丈夫だよ……お使ひ御苦勞、只今お見舞申します。サア喜兵衛行くのだよ。喜お出でなさい。若初めて行く家だ、お前供に来て來れないか、藥籠の一つも脊負て。喜藥籠なんざアありませんよ。若ナニ宜いよ蜜柑箱を風呂敷へ包んでお出でな……木刀はないかね。喜何にもありません。若箱提灯の棒を貸して

お呉れ、之を差して行かふ」と一緒に参ります、案内に迷られて奥の一間へ通ると喜先生御苦勞さま。若和女が御病人で。喜イエ夫が……。若ア、左様、どういふ御容體で在つしやいます……ハ、ア誰かに今までお見せになりましたか……。ウム、鈍澤に、ハ、ア……」暫らくすると立て店へ出て來て。若喜兵衛先方でいふ話しが乃公には分らないがね。喜だからお止しなさいといふのに、何とか瞞着してお丁ひなさい、一寸病人を見て、お茶をとでもいへば此所の家はお茶屋だから。若お茶といつたつて、呑様も知ねへせ。喜茶には式のあるものだから、此方は斯うだとか、何とかいつてね……。若ウム」奥へ來て、若エ、お家はお茶屋ださうでございますな。喜恐れ入ります、お好みなれば一ふく差上げませう。若頂戴いたしませう……。之は結構、御主人はどういふ式で。喜夫のは千家でございます。若ア、其れで分つた、貴郎は寸白でございませう。」



柳家小三治

エー當今は大分落語も六か  
 しく相成りまして、盛んにな  
 ればなる程、随てお耳づきま  
 すので、彼れも古し之も陳腐  
 だなど、御叱言を受けます

が、尤も名人が演じますれば、同一落語もお聴になる度味を増しますが、我々は逆もさうは参りません、夫が爲に時々苦しがりて、變なものを擔ぎ出しては、失敗を致します。先日も或喰道樂の方が、那アでもない斯うでもない、甘諸へバタをつけて召喰つて入つしやいました、之は餘り甘くなさそう、して見ると變るにも程があります、此のハイカラ長屋も、或はその轍で一口で御噴出しになるかも知れませんが、兎に角安店でも新料理だと、御交際に終ひまで御風味の程を願ひます。○「ライ吉田牛飯を喰ひに行かんか △よせ〜牛飯よりか今度横町へ新案ハイ

カラ飯と云ふのが出来たから、彼れを喰ひに行かう。○「フーム、ハイカラ飯は面白いな、貴様喰つたのか △イヤ吾輩も未だ味を知らんから、喰て見ようちうのだ、夫れに第一賣始めの事ぢやから價格も廉ぢやらう」杯と下素張た連中はどんなものかと出掛けて見ます。○「オイ、ハイカラ飯を二人前早う持て来い、どうじやい、女中共迄髪をハイカラに結つて居るぞ、素的〜 △貴様、之れを見い、御一人前金五錢としてあるぞ、果然吾輩の觀察通り破格の勉強じや」やがて女中が持て参つたのを見ますと、井の中の御飯へ淺蜷が汁でとぶつ掛けてあります。○「ヤ、淺蜷じやぞ、之れは味がハイカラなんぢやらう」喰べて見ますと、何れも之れも皆中味が御座いません。○「オイコラッ、女中どうしたのかい、此の淺蜷には皆身が入つたらんぞ、女中へイ身の無い所がカイガラ飯で……カイガラでは幾何にも流行る譯が御座いません、熊ア一厭だ〜人面白くも無へ、市區改正だなんて、何も裏店へまで擔ぎ込まねへでもよかろうじや無えか。何しろ一口にせへ覺も三百ツてえんだか

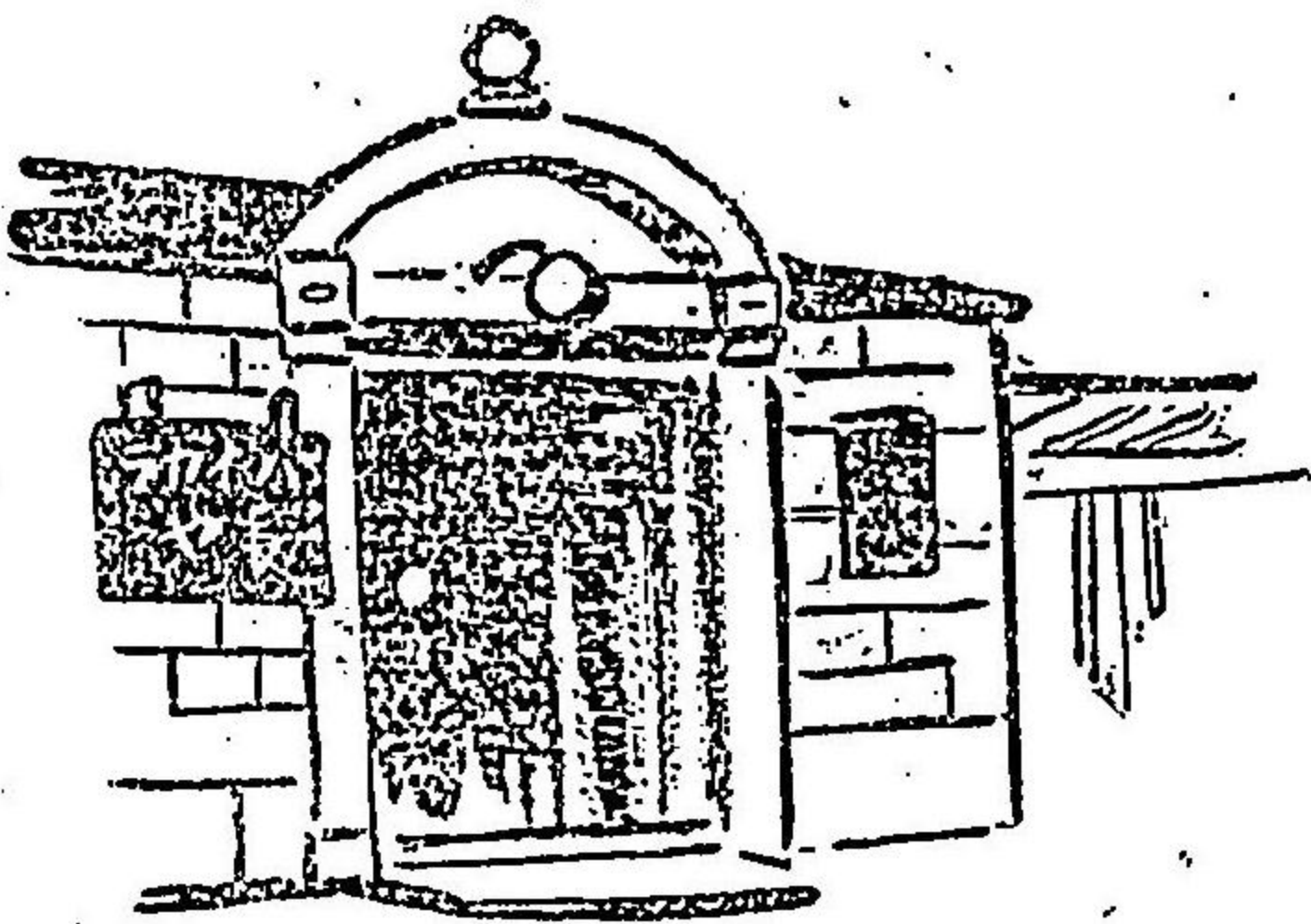


ら、俺達等にやア引越は大禁物だ……。だが何うも探す時にやア無へもんだな。一昨日ツから足を播木のように仕てえるんだが……。オヤツ晝日中戸締りがしてあつて、標札の無へ處を見ると、此ツア空店らしいぞ。何か張つてあるな……。何んだケ、イ、コ、ク、片假名は難有へな。サア其跡は何んだか譯らねへ、昔は娼妓の事を傾國と言つたてえな事を講釋で聞いたが、國を傾る所か、廂が傾いて居やアがる。夫に花魁の詫住居てえ柄じや無え。何しろ隣りで聞いて見りや



ア解るだらう。……。モシ〜お内儀さんへ、鳥渡お聞申しやすが、此所の家は空店ですかへ、女ハア、ですから貸家を捜す人の爲に廣く警告が出て居るので、戸外の電柱にも貼つてあります。熊ナール程、貸家の廣告でげすかい、所で大家は何所だか序に教えて貰えてえもんで、女ハア、家主の住居は此の角を曲ると突當りで、ハイカラ長家事務所と云ふ看板の出で居る家です。熊へ、ちやア此所が評判のハイカラ長家で、どうも小汚えカイカラでげすね。イエナニ大きにお喧ましよう。早速教はつた通りに來て見ますと、成程出窓の格子に黒塗の板へ金文字の看板が掛つて居ります。熊ア、此所に違へねえ。……。エー今日は、御免ねえ。眞ツ平御免ねえ。〇モシモシ貴郎、御用事なら其處で幾ら怒鳴ても無駄ですよ。熊へ、ちやア彼處に目鏡を掛けて新聞を讀んで居る禿

ア解るだらう。……。モシ〜お内儀さんへ、鳥渡お聞申しやすが、此所の家は空店ですかへ、女ハア、ですから貸家を捜す人の爲に廣く警告が出て居るので、戸外の電柱にも貼つてあります。熊ナール程、貸家の廣告でげすかい、所で大家は何所だか序に教えて貰えてえもんで、女ハア、家主の住居は此の角を曲ると突當りで、ハイカラ長家事務所と云ふ看板の出で居る家です。熊へ、ちやア此所が評判のハイカラ長家で、どうも小汚えカイカラでげすね。イエナニ大きにお喧ましよう。早速教はつた通りに來て見ますと、成程出窓の格子に黒塗の板へ金文字の看板が掛つて居ります。熊ア、此所に違へねえ。……。エー今日は、御免ねえ。眞ツ平御免ねえ。〇モシモシ貴郎、御用事なら其處で幾ら怒鳴ても無駄ですよ。熊へ、ちやア彼處に目鏡を掛けて新聞を讀んで居る禿



頭の親爺は聲でげすかい。〇「イーエ左様ではありませんが、訪問をなさるのなら、其處の電鈴を押すのです。熊、ナール程、之れを……まるで鯨の臍みてえなものでげすねえ……(チリン〜) 取次「ドーン 熊アッ驚かすねえ、鼻つ先に居るなら居るつて断はんねえな。動物園見てえな聲を出しやアがつて 取「イヤ之は失敬 熊何も謝るにも及ばねえが、時に大家は家かね。居るんなら鳥渡逢ひてえもんだが 取「ハ、ア、今日は面會日ですから在宅です。熊ソイツア困つたな。何時頃歸るんで 取「イヤ留守ではありません。宅に居るので 熊そうだらう、禿頭ア先刻チヤンと見て置いたんだ。在宅なんて瞞着したつて可ねえ 取「之れは恐縮です。シテ貴郎は何れの方で 熊私ア熊つてえもんだが、チツト大屋に相談があるんだ 取「ハ、ア。然らば暫時應接間にお控へを願ひます」やがて取次の案内で奥へ通りますと、古物ではあります、西洋扉の付いて居る座敷で尤も應接間と申しても、僅か二疊敷で夫れも勘平疊と云ふので皆な腹を切つて居ります。真中に怪し氣なテーブルを据え、

其兩側に中古の椅子が二脚、壁には煤けた十字架の額が掛つて居ります。熊笑かしやアがら二疊敷で應接間が聞いて呆れらア……。何だ、西洋の佐倉宗五郎てえやうな額だな。御叮嚀に硝子迄十文字に龜裂が入つて居やアがる。オヤ感心に椅子があるよ。ダガ迂濶腰を掛けて屋臺崩しなんかと來たら驚ろくからな。ウントコシヨツと先づ大丈夫か……(ガタリツ)アッ驚かしちやア可ねえ、夫で無くつてもヒヤ〜仕てえるんだ 家主「イヤ非常にお待ちしたです。吾輩當ハイカラ長家事務所長 董田星郎と申すもので、オホン……。熊お前はんがアノ大家さんで、へー大家なんてものは、昔から禿天窓と極つてるもんだが、お前はんは訝う髪の毛を伸して油で固めて真中から分けたり、どうせ柳原物だらうが、ヘツポコ洋服を着た案排式はどうしても大家さんてえ柄ぢやア無えね。ダガ之れも矢張りハイカラとか貝殻とか云ふ一件かね 家「イヤ之れは怪しからん。ハイカラとは即ち文明を意味するのですから、舊式の家主等とは勿論違うです。且つ當時は事務も非常に複雑になつて居るで

すから、中々老人輩に任せては置けません。時に君は……ハ、ア熊五郎君、イヤ矢張り前世紀のお名前ですナ。熊ナニ確かに私の名で、家イヤ夫は宜しいが……：所で君の要件を承まはらう。熊へーお前はんの處じやア、菓子屋も仕て居るのですかい。家ハア、何う云ふ譯かね。熊ダツテ羊羹を請取うつて……家さうではないです。君の用向を聞いと云ふのです。熊アさうか。外じやア無えが、角から三軒目の、ソレアノ廣告の出てる空店を借りてえんで。家ハ、ア借家申込ですか。ウム角から三軒目と云ふと十七番館ですな。熊何番地だか知らねえが、貸すんなら直にも出直して越して来てえんで……家ヤ、申込には應じるですが、夫には種々手續も要するので……マア珈琲を飲み給へ。熊此つア濟ねえ。何しろ朝から歩きづめて、滅法咽喉が渴いてる所なんで……アツブツ何でがす之れは……熊前世紀の人は之れだから不可。君珈琲を知らんかな。熊へー珈琲ツてやア、私も呑んだことアあるが、モツト甘へもんだがね。家イヤ砂糖増税の今日甘味を入れ

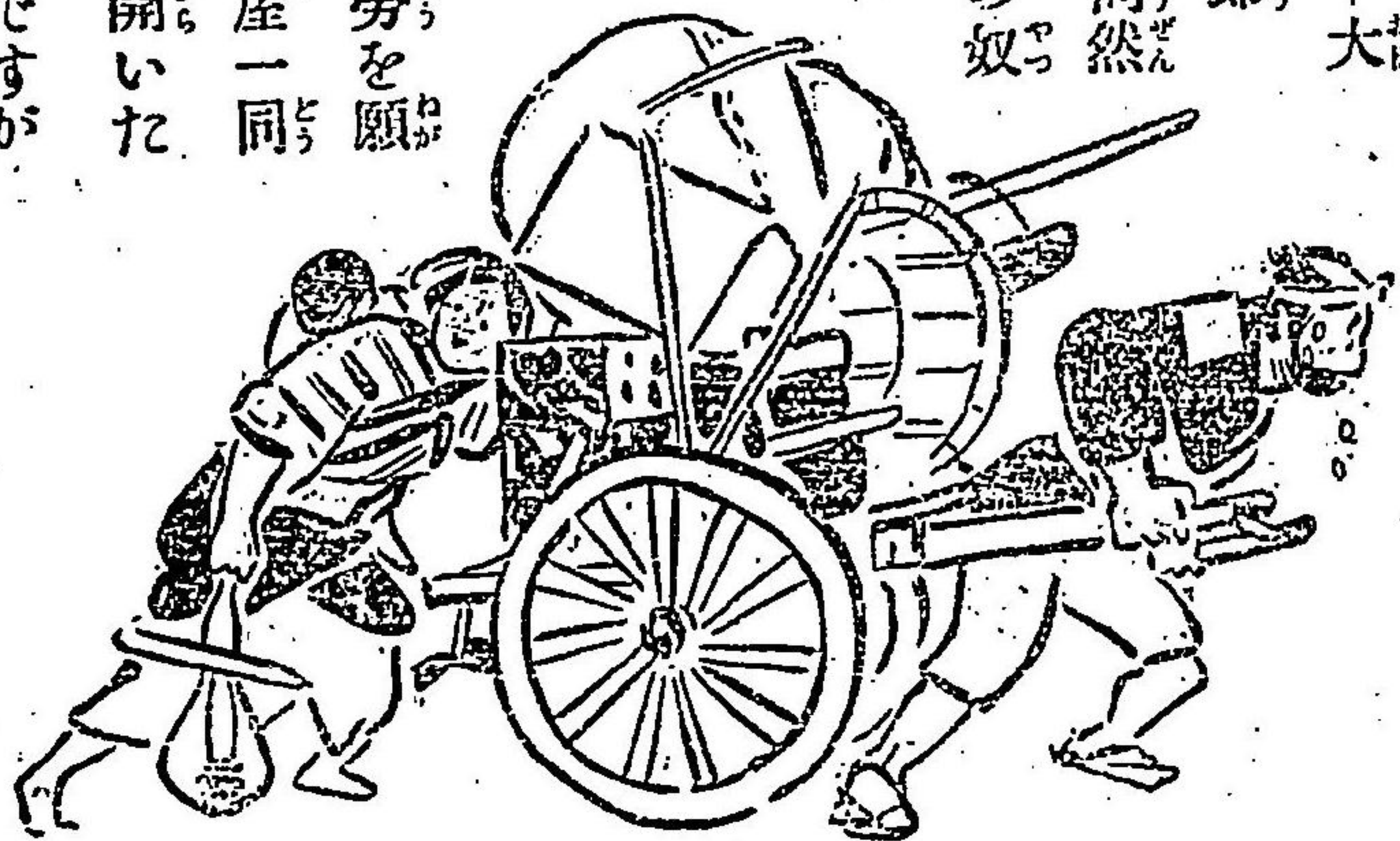
るのは經濟が宥さんでな。熊ウヘー家時に愈々移轉と決定の上は、此の借家申込書に君の族籍、職業及び家族の生年月日等を記入して記名調印を願はねばなりません。熊オツト待ねへ。さうペラく遣られたちや少とも解らねえ。モウ些と日本人にも解るやうに願ひたいねえ。ザツク balan にお平にねえ。家ハ、ア、ザツク balan にお平らは頗る前世紀を發揮して居ますな。併し君の言動は餘りに蠻的ですか。熊成程幻燈が晩にあるつてね。神田の錦輝館かね。彼奴も此頃はカツドウ寫眞つて云ふんだつてね。家愈々出で、愈々奇なりですな。併し閑話休題として、今少しく平易に云ひますと、此の申込書に、君の商賣や、お名前や、生れ月日を夫れく書き入れて、判を押して戴きたいと云ふので、熊へー今度は少し解つたが、まるで區役所見てえだね。だがお前はんの前だけど、私ア立派な無筆でね、其處はマアよろしくお願へ申しやす。家然らば當方にて代書をしますが、代書料を十錢……熊そいつア驚ろいた。區役所より高えが、マア仕方がねえ。書けねえんだから、我

慢して出しやすよ。家「其處で先づ君の族籍から伺ひませう。熊「戯談言つちやア不可ね、幾許汚ねー服装をして居たつてまだ賊を働いた覚えはねー。家「解らんですな。君誤解してはいかんですよ。士族か平民かを問ふたのです。熊「そんならそうと始めつから言やア好いのに、憚んながら此う見へても先祖代々の平民でげす。家「成程、夫れから君の家族は。熊「お前はんこそ解らねーね、只つた今平民だと言つたじやアねーか、華族で車ア曳いてりやア世話ア無え。家「益々解らんね、君には御令聞があるですか。熊「そんなものはありやせん。家「ハ、ア然らば君は未だ獨り者なのですか。熊「ナアニ嬖アに餓鬼が一人あるんで。家「ハッハ、殆ど珍ですな。熊「ナニ狎も猫も居やアしません。家「ハッハ、イヤモツよろしい、職業は車を挽くと云はれたね、勞働は神聖なり、車夫結構。併し荷も吾がハイカラ長屋に居住する以上は、青縞の腹掛半股引と云ふ舊式の服装では不可な。熊「フクソンなんぞ買やアしません。家「イヤ從來の服装では不可と云ふのです。熊「チャア、どんな服装をすれば好んで。家「左

様、先づハイカラ車夫の模範を作るには、ホワイト襯衣に、チヨツキを着て、縞のツボンに靴はマツキンレー靴でも用ゆるですナ。熊「戯談じやアねえ。靴なんか履いて商賣は出来ねへ。家「イヤ夫等は漸次改良をすれば好いですが……サア之れに調印を願ひます。イヤサ判を押して戴きたいので、申込書ですから實印には及ばんです。熊「實印なんか家へ行つたつてありやア仕ねえが、今日は生憎認印も持つちやア来ねえんです。家「然らば止を御ません、拇印を願ひませう。熊「ソイツモ濟ねえが忘れちやつたんで……。家「イヤ爪印でも好いと云ふのです。熊「爪印なら忘れつこねえや。十本ツ、持つて居やす。少と汚ねえが負てお呉んなせえ。家「ハ、ア之れで好いですが。夫から尙保證、連帶責任の借家契約證書を入れて、賃貸料豫納金所謂敷金十圓を前納し、茲に始めて確然たる契約が成立するですが、夫はマア移轉後でもよろしい。此處にハイカラ長屋規定書があるから一通り讀み給へ。熊「そんなものは何うでも好うがすね。話しが極りやア直ぐ配り蕎麥をしてえんだが、近所の蕎麥屋は何處なんで

……… 家「イヤ吾ハイカラ長屋に於ては左様な陳腐な習慣は無いです 熊へー蕎麥に陳皮を入れるんで 家「イヤ解らん子。そんな古めかしい事はさせないので其の代りに配りパンをしますのです 熊「パンは妙だね。第一安直で好らう。一軒分大抵幾程位えて 家「左様大通りの木村屋と特約がしてあるですが、一軒に付二十五銭、尤もバタ付きです 熊「へー驚いたね一軒二貫五百宛と来た日にやア、バタついたつて追附ねえや、ダガ餘まり高過るね 家「勿論前世紀の者とは生活程度が違ふです。尤も半分は吾輩のコンミッションで 熊「ウへー」熊さんも煙に捲れて半分は夢中で、餘程空家に困つて居たものと見へまして早速引越しと言つても譯はございませぬ。お手の物の車へ我樂多道具を積込んでお内儀さんが子供を背負て、ランプを提げながら後押をすると云ふ寸法で、夕方にはチャンと片附て仕舞ます。其晩は引越祝ひだと云ふので友達を呼んで飲明し内儀さんがベコ〜三味線を掻廻して、唄うやら踊るやら、一晚中大騒ぎでございます。すると翌朝事務所から即刻出頭と云ふので熊

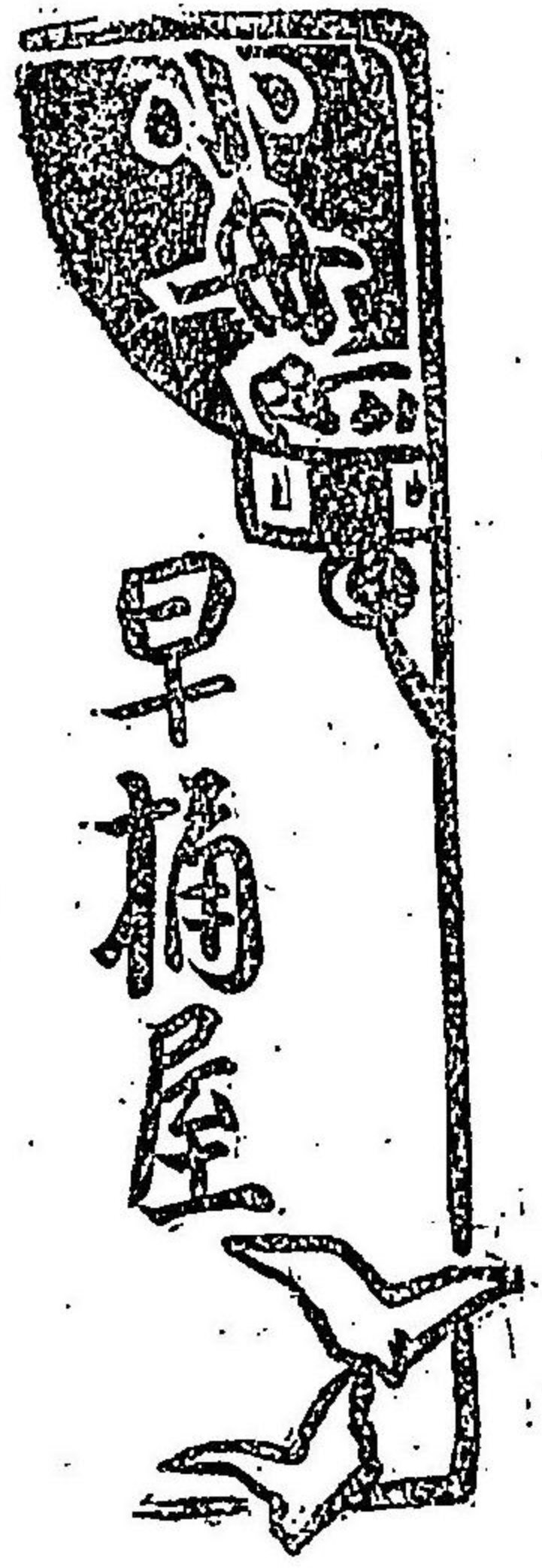
さん何事かと思つて早速に遣つて参りました 熊「エー大 家さんお早う 家「グードモーニング、ミスター熊五郎 熊「オヤモツ呼付かい。マア好や。大家と云やア親も同然 なんだから、時に夕はね引越祝ひだてえんで、友達の奴が角樽の一ツも持て来たんで、マア素手でも歸されねえて譯でね、ツイ一杯飲だもんだから、小とばかり騒いじやつてね、好い心持にグッスリ寢込でる所を使の奴に叩き起されて、直ぐ遣つて来たんだが、朝ばらからつ全體何の用なんで……… 家「イヤ御足勞を願つたのも即ち其の件でな。實は昨夜の騒擾に就て長屋一同の者が非常に憤激したですな。其處で早速協議會を開いた結果長屋中連署を以て君の彈劾書を提出して来たのですが



實際昨夜の行動は殆ど言語同断ですな。第一は安眠妨害第二は風紀紊亂ですと云つても君には了解が出来んでせうが、兎に角一同の請求通り規定書第二十一條に照して、新聞紙上に謝罪廣告を出して貰はねばなりません 熊へーお前はんの云ふ事は相替らず英語交りで、薩張り私にやア解らねえが、夕の騒ぎが悪かつたんなら、勘辨しといってお呉なせへ、長屋の奴等が腹ア立たてんなら、其處はお前はんから宜しくねえ 家然らば今回丈は特に情状を酌量して本刑に一等を減じて上るから、始末書丈をお出しなさい。吾輩何とか妥協の勞を探りませう 熊駝鳥でも鷺鳥でもそこは宜しく 家デへ始末書の代書料を二十銭…… 熊オヤ／＼罰金ですかい。マア仕方がねえや 家以來は屹度謹み給へ、全體如何に酒興の上とは言ひながら都々一なぞと卑俗極まる物を唄うとは實に怪しからん 熊へー都々一や端唄はいけねえんで…… 家勿論 熊スルト酒でも飲で騒がうてえ時にやア何を唄つたら好いんです 家先づ薩摩琵琶か、然らずんば新體詩朗吟 熊ウへー、大變な次第でげすな

這々の體で歸りましたが、夫から三日目の朝の事、床の上で考へて居りますると突然カン／＼と云ふ鐘の音 熊ヤア火事だな」と寢惚氣眼を磨りながら、戸外へ飛出して見ましたが、一向に火の手が見へません 熊エーお向ふの旦那火事は何所なんでげす ○君火事では無いですよ、熊ダツテあの通り摺鐘で…… ○安心し給へ、彼れはね毎月一回第三の日曜日をして、此長屋居住者一同の安息日となつて居るので、今日は即ち其安息日であるから、事務所で祈禱及び講話會があるので。夫れで寺院の鐘に擬らへてあの通り鐘を打つて居るので 熊へー夫やア些とも知らなかつたが、全體何時頃死んだんでげす ○誰が 熊大家さんがサ ○家主が死んだのでは無いんですよ 熊ダツテ安息香を持てツたり、寺の鐘を叩いたりして居ると云ふじやありませんか ○ハ、ハ、ハ、解らんね君は、今日は家主の所で講話があるので、長屋中皆傍聴に行くのですよ 熊へー長屋中で庖丁を持つて喧嘩でもあるんですか ○まだ解らんかね。今日はねえ、家主の所でねえ、種々の御話が

あるので、長屋の者が皆商賣を休んで、夫を聞に行のですよ。どうです解つたですか  
 熊「ナール程ヤツと解りました。スルと矢張貝殻一件なんだね。折角だが今日は  
 書入の日曜だから、私ア御免を蒙りやすよ。〇「夫りや行く行んは君の隨意ですが、  
 欠席すると一圓の罰金を徴されるですよ。熊「エツ、其奴ア驚いた。じやア仕方が  
 無へ鳥渡でも出掛やせう」罰金に驚いて朝飯を掻込むと直に家主の所へ遣つて参り  
 ました。成程長家の者は皆集つて居ります。やがて出て参つた家主は一段小高い所  
 へ上り。一種異様な聲を張り上げて「家諸君、吾等ハイカラ長屋居住者一同はイエ  
 スキリストの加護を以て無事に今日の安息日を迎へました。即ち神に感謝の祈禱を  
 捧げねばなりません。アーメン……………一同「てーんにまします我等の神よ……………」一  
 同が揃つて黄色い聲を振立て讃美歌を嘔ひ出しましたので、熊さんは吃驚して目ば  
 かりバチクリ 熊「矢つ張り誰か死んだのに違えねえや。……………南無阿彌陀佛、南無  
 阿彌陀佛……………」



柳家小せん

毎度伺ひます廓話  
 し、附馬を巻くとい  
 ふ悪い智恵もあつた  
 もので、いくら目の

利いた若衆でも、ギウとした扮装をしてゐると、一つばい引掛る 若「エ、如何様、  
 近頃不景氣で遺線つて居りますが、一晚の御愉快は如何さまで 客「駄目だよ、若い  
 衆さん往けないよ、駄目だよ 若「へ、へ、へ、お馴染様もございませうが、偶にお  
 床の變りましたのも異なるもので、花魁衆は皆な部屋持でございませう。如何さまで  
 客「アハ、ハ、若い衆さん、言ふ事が少し悪かつたな 若「へエ 客「何さ、私だつて  
 ね、お宿入りの晩大門を潜つて来た譯ぢやアない、花魁の襦袢を見れば本店か助店  
 かの區別は付く積りだ、花魁衆は皆部屋持は宜かつたな、幾らね、君がさういつて  
 お勧めになつても、實は懷中が淋しいんだよ……………ア、笑つてるな、本當だよ、と

いふと御無理に願ふといふんだらう。五尺の男が大門を潜つて金を持つて居ない筈はないといふかも知れないが、之にはね少しく曰く付きといふのは、私の伯父さんは金貸が商賣で、大分此の仲之町のお茶屋さんにお金が貸してあるんだ。月に日が定つて夫を取りに来るんだ、伯父が風邪ッ胃で寝て居るんだ、どうだお前身體が明てるのなら取つて来て呉れないか、へエぢやア行つて参りませうと、其の金を取りに来た。門を入つて見ると、今燈明が黠いたばかりといふ、氣が付いて見りやア先方だつて客商賣、夫アね縁起の良い客でも取らうといふんだ。所へへエ今晚はと私が入つたら、先方も餘まり喜びはすめへ、歸つた跡で浪の花なんぞを振られるのも忌だ、ブラリと運動をしやうと思つて、君の家の門へ立つと大分玉揃ひだ、涎こそ垂らさないが暫時ウツトリとして、斯うやつて立つて居たんだ、折角のお頼みだが今いふやうな譯だから、若へエ、お話しは能く分りましたんですが、手前の方でも近頃の不景氣で弱つて居ります、何も景氣になります事、其所を無理にお

願ひ申すんですが……客アレ駄目なんだよ、遊びたくつても懷中にお錢がないんだよ、若ですが其の言葉の御様子では、仲之町のお茶屋さんへお金を取りに、在しつたといふやうなお話しですが、客ウム成程、茶屋から金を取つて遊ぶのかい、夫ア往けません悪だよ、女郎買の相談だの、煙草直上なんといふものは、突然にバツとやらなければ成立つ譯のものぢやアない、私が之からお茶屋へ行つて金を取れば、是ア伯父さんのお金だから跡へ引返さないで家へ歸つて行きます。どうだい、君の方でも茲まで骨を折たもんだから、私も世話焼かせたかアねへ、お互に讓歩で、今夜は快よく遊んで、明日になつてサラ／＼と書いたものを君が仲之町の茶屋へ持つて行けば、金を借りる人と違つてイサクサはねへ、夫で宜ければ上るがどうだい、若へエ、成程、デハ明朝手前が先方へ書付を持つて参ればお金が貰はれますので、客イサクサはねへんだ、若へエ、さういふ事に願へれば手前の方も結構で、客さうかいぢやア厄介になるよ、若有難う存じます、……お上がんな



「さるよ」遂々若い衆は一ぱい引掛つて了りました。此んな奴だから餘り遠慮をして居ない。客「オイ若い衆さん、どうも種々御苦勞。え、ナニ花魁かい、今便所へ行つたんだ、所でね私はチツト飲れるんだ、お店だからそんな事もなからうが、店に依ると、どうも御酒が悪くつて、翌る日の頭ピン／＼などは往けない。甚だ生意氣な事をいふやうだが、御酒は鐘詰といふやうな事にしてお呉、夫にね、花魁を始め、新造衆でも、私は御酒は往けないが麥酒なら飲れる、私の方でも酔醒しに麥酒も悪くないから、麥酒も入れてお呉れ。客「へエ／＼。客「臺の物は成べく澤山にして、お皿ばかり大くつて中がチヨボ／＼で、お刺身の間が四寸五分づゝも放れて居るなんぞいふのは往けないよ。客「畏てまりました。客「夫から花魁と差向ひちやア話しがたれるね、本名を聞いたり、年を聞くなんざアお床入りまで取つて置きたいよ。チトお座敷を賑やかす爲めに藝者衆を二人ばかり呼んで貰ひたいもんだが。デ御祝儀やなんかは萬事宜しく蝶々萬端頼むよ。客「畏まりました。客「若い者は面を喰つて出て行

く、應て藝妓が来る、詭らひ物が入つて来る、敷を騒いでお引け、翌朝「客「へエお早ふ。客「お早ふ、どうも昨夜は快い心持に遊んだよ、遊びつてえ奴はね、翌朝快い心持の時と、又忌な心持の時があるもんさね。ユウ若い衆さん、マア入り玉へ、君だつてね、腹からの若い衆さんではなからう。随分道樂の結果の苦勞人だらうが、君方が矢張遊んだつてさうでせう。ねへ、一寸何か祝ひの御酒を頂いて、勇氣が付いて、威勢の宜い俵へ乗つて、五十間の敷石の上をガラ／＼ガラ、男に生れて悪い心持はしますまい。入つしやいましていふ聲に送られて、巾の廣い階子をトントンと上つて、新造衆や何かのお世辞を肴に御酒を頂いて、應てお引けになりませう。ねへ、翌る朝になつて、チヨイと花魁から楊子を貰つて、下へ降りて行つて、女の子に兩方の袂を引張られながら顔を洗つて、お部屋へ歸つて來たと、茲までは女郎買なるものは誠に愉快だが、さて君方が此の野の引いた紙を持つて來ませう。客「へエ。客「此奴が無いと誠に宜いもんだが、扱世の中といふものは自由にならないもん

で、………拜見しませう。勸進帳を一ツ献じませう。若へエ、之に明細付けてございませう。客ウム、メを讀んでお呉れ、幾程だへ。若へエ、メて十四圓六十錢になります。客違つてらだらう。若イエ、客他のだらう。若イエ此方様で、客違つてさうだよ。若い衆さん、十四圓六十錢といふと何かへ、彼の藝妓の御祝儀だの、失禮ながら君方の蝶々も入つてかい、残らずで十四圓六十錢かい。若左様で、客安いはア驚ろいたねどうも御祝儀萬端で之だけかい、近頃だね、恐れ入つたね、御内所の働らきで女の子は玉揃ひと来たんだ、失禮ながら君の家の流行やうに提灯持をするよ。若へエ、有難う存じます。客でね若い衆さん昨夜の約束だ、今朝手紙を書かふと思つたんだが、仲之町の茶屋へ紙入に認印を忘れて来たんだ、此の印がボンと捺つて居ないと先方で信用をしないで、行つたり来たり何だ手数が掛つて仕方がない、幾らもない仲之町の茶屋だ、一緒に来てお呉れな。若へエ、お供をいたしませう。客ぢやア頼むよ。遂々若い衆は瞞着されて表へ引張り出されました。茶

屋の前まで来て、若イヤ今格子の拭掃除をして、門口へ箒波を打たして、盛鹽をした處へ、お早うございませうと、入つて行くのは、先方も縁起商賣だからね、朝つから出錢だから快い心持ちやなからう。どうだえ私と一緒に交際ひ玉へ。遂々大門から出まして、堤を上り右へ切れて田町。客コウ若い衆さん、どうも遊びをした朝はどうも湯へ入らないと、何となう身體が極りませんね、一ツ風呂交際ひ玉へ、………オイ番臺、濟まないが手拭を二本貸して洗しを二ツ取るよ、夫から石鹼は要らないから練を二ツ………君チヨイト濟まないがお立替を願ふ、跡で返すから。若へエ、若い衆は面を喰つて湯錢を立替、湯から上つて、客之から跡戻りは忌だし、淺草の方へ行きませう………コウ呑み過の溜飲を吐いて、身體の膩を落した所は、身體が軽くなるやうな氣がする。チヨイト下ツ腹がドンと来たが、此邊で何か喰ないと衛生に害がある、之から平野でもないし、チヨイト淡泊なものを食したいと思ふが、といつた所で馬道へ入つて競争馬肉鍋一ぱいたつた四錢などは感心しません

ね。朝ッばらだから湯豆腐で一ぱいやりませう。交際玉へ「瞞着して湯豆腐屋へ入つて酒を飲んで、雀、姐さん幾程だへ……八十七錢、チヨイト君濟まないが一圓お立替を願ふ者へエ、お氣の毒様でございます、生憎……」雀ないといふのかい野暮だよ、隠しッこなしだよ、耻を搔せちやア往けない、跡で倍にして返すよ、イエさチャンとお湯へ入る時に、あるかないか見てあるんだよ、黙つてく、武内宿禰を一枚出し給へ、……姐さんお剩錢はお前に上げるからお茶をさして来てお呉れ」勝手な熱を吹いて其所の家を出る。矢張り淺草の方へブラ〜、雀、ユウ朝酒といふものは癖アを質に置ても飲めといふのは茲に違ひねへ、只煩べたをポツと赤くして、朝風に弄らせるなざア千兩だね、男と生れた冥加に之が出来るんだ、マア君運動し玉ひ、餘り過激にやると往けないが、程度にやれば此位の藥なものはありません……オヤ何時か池へ突當つたか、之から右へ折れて松井源水を振出しに、競争の活動寫眞を見た所で張合がないから、左りへ花屋敷。相變らず流行る觀覽物だね、お婆さんが孫に手でも曳かれて来るには結構なものだからね。茲を真直に焼物屋やお掛軸屋を見た所で仕方がない……エ、お婆さんの銅像、チヨコナンと座つた形は、何かに斯ういふ形があつたよう……人形焼の焼過ぎ見たやうだな。觀音様のお堂、相變らず立派だな、十八間四面といふが中々大きい。之が空店になつたら雑作が高いだらう……君正面の段々が幾個あるか知つてるかい。知らない今度勘定して見給ひ九段あるんだからね。さうだい、大きな燈籠だな、闇を去つて明きに就くと書いてあるが、之ア些とも明るくはないね。……仁王様は相變らず大きい、諸式の上つたのにお瘦にならん所が不思議だ……人形焼屋、どうだえ玉子の穀がズツと盛上つて居るが、何も一日で那れだけ使ふ譯ぢやアない。去年の秋から積り積つて那れだけになつたんだからね。見給ひ常磐からね。女中が焼杉の庭下駄を穿て出た来たよ、畜生ッ、献上の丸帯を見せびらかしに出て來やアがつたんだな。彼の帯だつて造らへるには、給金の二月位確かに借りましたね。オ、鉦焼

ね、お婆さんが孫に手でも曳かれて来るには結構なものだからね。茲を真直に焼物屋やお掛軸屋を見た所で仕方がない……エ、お婆さんの銅像、チヨコナンと座つた形は、何かに斯ういふ形があつたよう……人形焼の焼過ぎ見たやうだな。觀音様のお堂、相變らず立派だな、十八間四面といふが中々大きい。之が空店になつたら雑作が高いだらう……君正面の段々が幾個あるか知つてるかい。知らない今度勘定して見給ひ九段あるんだからね。さうだい、大きな燈籠だな、闇を去つて明きに就くと書いてあるが、之ア些とも明るくはないね。……仁王様は相變らず大きい、諸式の上つたのにお瘦にならん所が不思議だ……人形焼屋、どうだえ玉子の穀がズツと盛上つて居るが、何も一日で那れだけ使ふ譯ぢやアない。去年の秋から積り積つて那れだけになつたんだからね。見給ひ常磐からね。女中が焼杉の庭下駄を穿て出た来たよ、畜生ッ、献上の丸帯を見せびらかしに出て來やアがつたんだな。彼の帯だつて造らへるには、給金の二月位確かに借りましたね。オ、鉦焼

鉦焼、せうだえ道樂者が見たらどういふ心持がするか……玩具屋、どうだい  
 此の電車の方向にベンチに切符が付いては十八錢、大門行がクルリと廻すと淺草行  
 になるのは不思議だ。面白いでせう……餘り面白くない、左様ですか……豆屋  
 相變らずパチくやつて居る……紅梅焼屋ペタく叩いて居る……若貴郎  
 々々、仲之町のお茶屋さんまでといつて私は出たんで、何方へ行くんです 客夫ア  
 君御迷惑は掛ません、大丈夫ですよ、御安心なさい 若御安心なさいと仰しやつて  
 私は主人持の身體ですからね、客茲まで來ると仲之町の茶屋へ歸るのは大變だ、私  
 の伯父さんの家まで來てお呉れ、勘定をするから、立替も萬事萬端御返却をするか  
 ら、實はお前伯父さんの家は誠に言ひ難い商賣なんだ 客へエエ 客早桶屋とい  
 ふんだ、君の所だつて客商賣をするんだ。早桶屋とは言ひ難いだらう 客イエ、手  
 前共の方では却つてはかゆきが宜いなんてと言ひますんで喜びます 客ヨツ感心  
 く、流石に君は客商賣をして居るだけに角が取れて圓いね、丁度磯の貝殻見たや

うなもんだね 若恐れ入りました 客其所まで來てお呉れ、スツカリ勘定をするか  
 ら、いろいろ君に厄介になつたから何かお禮をしたいが、失禮ながら御帯が山が入  
 つて居ます。之から陽氣がポカと來て、ギエツ  
 と締た帯の掛けが猫ぢやらしになるなぞア餘  
 り感心しませ  
 んからね失禮  
 ながら献上だ  
 けれども帯を  
 一本お禮に差  
 上げませう  
 若恐れ入り  
 ました 客ナ  
 ーニお禮には  
 及ばないよ、  
 といふ中に伯父の家の前へ來たよ、眼鏡越に外を見て居るのが私の伯父だ、那が却



々道樂者だつたさうだ、私のいふ事なら何でも聞いて呉れるんだ、一緒に入ると拙いから、一寸濟まないが待つて居てお呉れ 若「へエ 客伯父さん今日は 亭「ハイお出でなさいよ 客「お願ひがあつて來ましたがな 亭「ハイ〜 客「實はな那れへ連れて參りました。那所に立て居る男ですがね、那の男の兄貴が腫の病で急に歿なりました。平素から大柄な男が腫の病で歿なつたので、普通の早桶では逆も納まりません。小判形の大一番でなければ往けないといふんです、何しろ形が變つて居るので、何所へ行つても出來で間に合はないんで、此方にはあるだらうと思つて上つたんです。がね、御無理で相濟みませんが是非造らへて頂きたいんですが如何でございませう 亭「ハア〜、小判形の大一番、面白い形だね、……どうだへ其方は、ウンウン、ぢやア宜いな、お前さん折角來なすつたもんだから造らへて上げませう 客「エ、拵らへて下さる、有難う存じます、何分どうかお頼み申します……オイ君若「へエ〜、どうです…… 客「どうも斯うもない、伯父さんが萬事拵らへて呉れ

るといふから大丈夫だ……出來ましたら此の男ですから 亭「ハア〜お前さんがへ 若「へエ、どうも飛んだ御無理を願ひまして 亭「イエ無理だつて私の方も商賣ですから、今直さに拵らへて上げますよ 客「有難う存じます 客「宜いかい、出來たら受取つてね、又近い中に行くから 客「恐れ入ります 客「出來ましたらどうぞ此の男に、私は一寸小買物をして來ますから御免下さいまし、ハイ左様なら 亭「エ、小僧や蓑盆を持つて來な、……サアお前さんお付けなさい、今直さに拵らへて上げますよ 客「どうもお忙がしい所を飛んだ御迷惑を願つて 亭「イエ迷惑だつて私の方も商賣だ、併しまア後の事もあるもんだから成たけ心配をしなさらねへ方が宜うございますよ 若「へエ〜 亭「お氣の毒な事をしたね 若「へエナニ 亭「長い事かい…… 若「へエ 亭「イエさ長い事かよ 若「イエ一晩で 亭「一晩……シテ見ると急に來たんだな 若「突然に入つしやいました 亭「入つしやいましたは訝しいね、昨夜が通夜かい 若「お通夜、御商賣柄ですね、昨晚お通夜でした 亭「どうだつたへ 若「へエ大分

お賑やかでございまして、藝者衆などが入りまして亭へエー、開けたなア夫ア、木魚の頭をボク／＼叩いて居ねへで、藝者でも上げて騒ぐなんざア開けたもんだな佛は喜んだらう若へエ／＼佛様は大分御機嫌でした亭機嫌だへ、言ふ事が訝しいせ、今直きに出来るんだ、他に要るものはないか、付き物はよ若へエ恐れ入りますが、那の餘まり何したから其の帯を一本やると言ひましたかな亭帯、宜し心得た。オイ帯が一本付くよ、笠は宜いかい若笠の事は何とも仰しやいませんでしたが亭ハア帯だけだよ、お前さん今直きに出来るんだが、お一人のやうだがどうして持つて行きなさるえ若へエ手前は之へ紙入れを持つて参りましたが亭紙入は持つて来なすつたらうが、どうして持つて行きなさるんだ……ナニ出来たか、一寸御覧なさい、氣に入るめへが之だよ若どうも之はお立派で亭褒めてちやア往けないよ、木口手間代ともで四兩二分だ若四兩二分亭働らいて置きますよ若へエー、何誰のお誂らひで亭何を老惚けて居るんだ、お前の誂らへで拵らへた

んだ若冗談いつちやア往けませんよ亭冗談ぢやない、お前の兄貴が歿なつたんで頼まれたんだ、四兩二分に働らいて置く若冗談いつちやア往けません亭亭一體那の方は何だい若へエ昨晩那の方が勘定が出来ないで、お宅へ参ればお拂ひ下さるといふんで、また他に立替物や何かい澤山あるんです亭アハハハ、オイ附馬でもする奴はモウ些と頭を働らかせな。肝腎の對手を逃して了へば勘定は誰がする若どうも飛んだ災難で、何とか一ツ亭夫がよ、普



通の品なら又次へ廻すといふ事も出来るが、小判形大一番で、此んな据風呂桶の化物見たやうなものはどうする事も出来ねへ。仕方がねへ、手間代の所は負けてやるから、木口代二兩置いて此奴を持つて行きな。若「冗談いつちやア往けませんよ、早桶を引脊負て大門が潜れますかい。亭「生意氣な事をいふな、此んなものを乃公の方へ置たつてなんにもならねへ、愚圖々々いはずに二兩置いて持つて行け………奴「脊負せろく。若「貴郎モウ二兩の事はさて置いて、一錢もありません。亭「ナニ錢がなければ仕方がねへ、小僧や、廓まで附馬に行け。」

三遊落語十八番終

明治四十四年七月九日印刷  
 明治四十四年七月十三日發行

定價金三十五錢

不許複製  
 落語十八番  
 附 奥

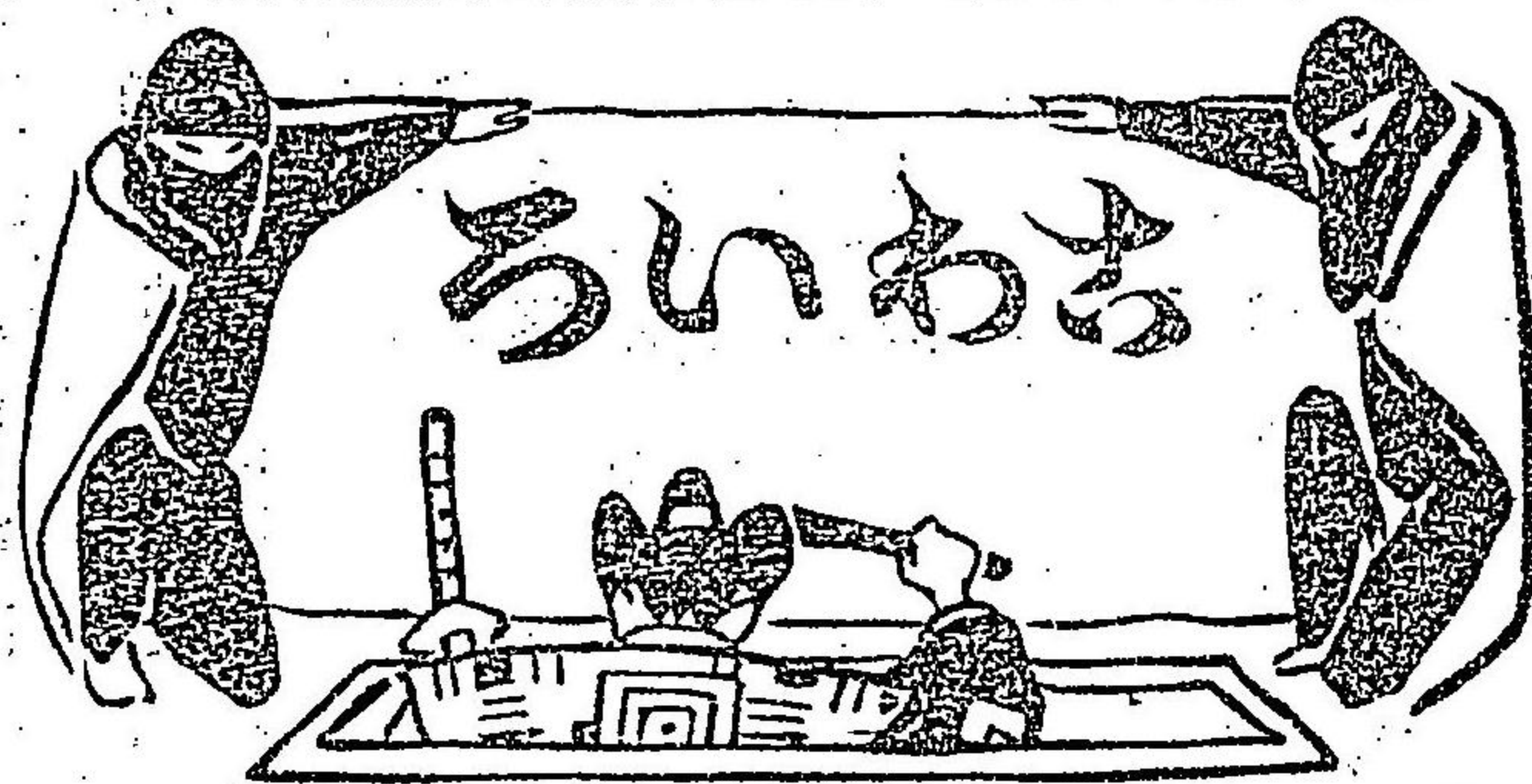
編輯者	曉 紅 生
發行者	東京市芝區三田三丁目七番地 神谷竹之輔
印刷者	東京市神田區松住町五番地 菅谷十一郎
印刷所	東京市神田區松住町五番地 碓 文 舍

發行所 東京三田三芳屋書店

電話芝三一七六番  
 振替口座東京壹壹壹壹六番

近刊

(入挿葉數眞寫優名舊新) 編人山筆紅



菊半形全一冊 紙員二百餘頁 郵税共金廿錢

花の廓の北東は云ふもさら、粹なそんじよそこの新道に何ぞ御最負を兩三枚と意氣な天窓の置手拭、さては旦那衆が一酌の興に、アラマアそつくりと大受の御自慢さつせへ名優の身振聲音、藝の中の意氣な藝、紅筆山人とは限取に顔を隠した名、其通な人が藝壇に遊ぶ長い紀念として、チヨンと一編木の頭で頁の幕を明ければ、細く書割の至り盡せり御存じ筆の廻り舞臺、遠からん者は音羽屋の舊派から、新派で一番伊井高田、近くは寄つて三芳屋が大氣取の出版、直は安敵のコレサは涼みの影芝居、どんな役者も心のま、弓矢八幡噺は申さぬ、色よい返事の御注文、さアさ早く御聞かせ下され……。

近刊

三蝶 大人編

評現代都々逸集

附都々逸入門

袖珍形全一冊  
定價金貳拾錢  
郵税金四錢

讀賣新聞紙上にて目下大評判の江戸ツ子の編者が、あらゆる現代の都々逸中より最も秀逸と認めたるものゝみを選抜し、是れに大人獨特の輕妙にしてしかも奇抜なる評を一句毎に附したるもの、都々逸作者は云ふも更なり、よし都々逸作者ならざる人も是非一讀し置く必要あらん。



近

刊

二代目三遊亭圓左講演 山本昇雲畫



袖珍形全一冊  
郵税共金卅錢

新進氣鋭の高座振りに確かの手堪へ、二代目圓左が亡父譲りの扇子一本、お可笑味を真から割出す類の無い呼吸で、軽い風味の一口噺、一寸緋いて一寸御笑ひの諄くない處、滑稽の上乗、亦御座興に皆様が御用ひも乙な物と、自慢では無いが弊房が働らいた工風、百談一卷の大安賣、さアさ召ませ〜。

近

刊

柳家小三治講演 山本昇雲意匠  
笠井鳳齋挿畫

### 小三治新落語集

四六判全一冊  
紙員二百餘頁  
郵税共金卅五錢

落語界に名人多しと雖も、兎角古きを古きまゝ謂はゞ時代遅れと成り勝がうらみ、茲に柳家小三治は時代思潮の何者を知つて古きを研究して新らしき頭腦に練つた此れこそ時世の要求に應じた新落語の極粹、古き趣きと新らしき味合は先づ此本が一手捌き。

落合芳鷹畫

四六版全一冊  
紙數二百餘頁

小せん新落語集

郵稅  
金卅五  
錢共

鹿界柳派の秀才小せんは實に——落語集  
の御披露に些堅い詞だが——新進氣鋭の人  
天明振を新らしく饒舌活して通語警句の百  
出、亦類を見ない所、今様落語の極製、當  
世の穿を言はせて憎らしい程身に泌みさせ  
る、其粹を撰つてなつたが此集、此れを讀  
逃さば時代の通に遅れると申すもの也。

落合芳鷹畫

四六版全一冊  
紙數二百餘頁

會我廻家喜劇  
圓歌新落語集

郵稅  
金卅五  
錢共

これは、關西は言ふまでもなく花の東へ  
來ても新舊の大舞臺を向ふへ廻はして、泡  
を吹かせる稀代の人氣者、會我廻家兄弟と  
滑稽の交換をして、彼は舞臺に是は高座に  
新らしい作新らしい妙味を發揮して居る三  
遊亭圓歌が一杯の講演集、弊店が獨特の  
意匠の凝方と精巧の速記に、謂はゞ膝の上  
で觀られる會我廻家劇、御暇も缺さず御散  
財も御安い世に氣の利いたオツな本はこ  
れちやく。

朝寝坊むらく講演 悟道軒主人速記

# むらく新落語集

四六版全一冊  
寫真版數葉入  
定價金三十錢  
郵税金四錢

茲に御機嫌を取結ぶ、當時扇一本高座の賣出し、新進の大家七代目むらくの新落語集、清く面白い、美しくおかしいが落語のお価値、其のお価値の納まる處は旦那様奥様坊様嬢様さてはおばアさんが川へさぶく命の洗濯、皆様が平常お働きの肩の凝りをしつかりと落とし斬の粹な本、御なぐさみを重さねて、演者が得意の「稽古屋」の身振を其儘寫真にして頁の間へ御愛嬌、申さば落語の活動寫真寄席へ行かずとも、淺草へ行かずとも、此本一ツ御膝に置かばお楽しみは湧いて出る、何度御覽にならうと重さねての御散財は入らぬ事、さアさ早いとこ入らはいく。

初代談州樓燕枝編

# 滑稽三題噺

全一冊  
紙員二百餘頁  
送料共金二十錢

鳥渡した題を三ツとらへて、鳥渡作つた程のよい可笑味、當意即妙巧まない處にこいつア妙がある三題噺、蒐めも蒐めたり其名作を百あまり、たい讀むでお可笑いばかりか、コリヤ洒落の研究、皆様も一ツ有合せの御三題でやつて見るのもおなぐさみ、申さば滑稽の御指南、取敢へず此本を三題にすれば、命の洗濯、臍の皮、意氣な研究、さアさ皆様トシくと御求めなされ、三題噺に長い御思案は御無用。

落語研究會員 柳家小さん講演

# 小さん落語集

落合芳麿口書  
四版全一冊  
紙員二百餘頁  
定價金三十錢  
郵税金六錢

緋けは愛さを忘れる茗荷屋の泊りから、富久の常り籤、恭々しくも莫迦々々しいてんしきの箱入、位牌屋のあたぢけないお可笑味、橋場の雪はやきもちの見本雛鏝、真田小僧は横着者の腕白くらべ、勿上つた武助馬の大車輪、禁酒番屋の酔拂ひ、閉込めはごろほらが和合の神となるお笑ひ、皺めは一名頓智、蕨醫者先づは左様に番々小さんが得意の滑稽妙話、ものはづくしのお可笑いものは——面白ものは楽しいものは——の此三ツの問ひに、唯一言此本と答へれば直ちに秀逸は疑ひなし。

落語研究會員 橋家圓喬口演

# 圓喬落語集

落合芳麿口書  
四版全一冊  
紙員貳百頁  
定價金三十錢  
郵税金四錢

落語界の稀人圓朝師の門に出てさらに一家を爲す、當時一の名人と云はれる圓喬の落語集、幕明きは素人茶番のお可笑味の寶藏權助が當役、さては素人芝居の通な滑稽、一ツ穴、美人局は得意の艶を充分に聞かせ、附馬の附馬は面白い圖抜け一番早桶の急拵へ、牛褒めは與太郎のトボケたお世辭、情死の情死は情の底から自然に出た妙話、百人坊主はオヤマアおけがなくつてお芽出度い大笑ひ、三枚起誓は照合させてこれは一、三十石の入舟は演者が自慢の關西辨の遣ひ分から江戸前の鼻ッ張を聞かせる滑稽の極粹、先は斯様に幕明きから打出しまで……讀者は被有る、眞に面白いてなこれだね。

其角堂宗匠題句 落合芳麿書

# 一休悟道錄

ボケツト形  
總ク羅斯美本全一冊  
紙員二百六十餘頁  
口書三三色版  
郵稅共金三十五錢

七才の時から世の中を鵜呑みにして居た、其勢ひで一世をトボケ通した、禪師一休が一言一句一手一步を、曉紅君亦一種不可思議嘗てない輕妙な筆法で縱横無盡に書きこなしたもの、抱腹絶倒の後方で確固とした深い意味のある處、さてさて稀代の珍書が出来たものかな。

高須梅溪君序 無漏道人編

# 諸國一休禪師漫遊

口繪寫真版  
四六版全一冊  
紙員四百六十頁  
定價金四十五錢  
送料金六錢

諧謔の底に眞理を籠め、洒落の裡に情を説き、知らず面白く人を善道に導く、いたづら小僧の宗純から紫野大徳寺の大禪師と納るまで、浮世の外から浮世を觀て、一世を通じて笑ふて過ぎた奇僧一休、一步あゆめば即ち奇行、一言出れば即ち警句、妙と云ふ字の解は此書に據つてこそ極めて居様、禪師の夫れ、門松は冥途の旅の一里塚、早く買はねば直ぐに賣切る。

大島寶水君著

滑稽十二月

饗庭篁村氏序

岡野知十氏序

鏑木清方氏畫

勝田蕉琴氏畫

四六判全一冊

寫真版及木口畫插入

紙員二百五十五餘頁

定價金三十五錢

郵稅金六錢

268

133







幽霊寝

三遊亭圓歌

エー毎度御道樂の御噂が出でますが、此の御道樂も大概程度のありまするもので殿方が婦人を對手にお慰さみの中は宜いが、終には溺れまして、永年添つた、子供まである女房を出して勤め上りの女を引入れるなぞいふ事になると、飛んだ間違ひが起ります、又斯ういふのが材料になつて落語の纏ることもございます。○「サア、皆んな此方へ来て呉んねえ、残らず揃つたかえ。△「ウム、皆んな揃つた。○「イヤ皆んなを態々呼んだのは外ぢやアねえが、お前達今度の熊の嫁アを見たかえ。△「見た、昨日の朝見た。○「俺も昨日初めて會つたが、巫山戯てやがるなア、お早うございますと、此方で挨拶をしたら、ツンと上を向きやアがつた、餘ッ程殴つてやらうと思つたが、假令何でも人の嫁アになつてるもんだから我慢をしたが、可愛想

なのは先の内儀だなア、子供まである仲を出して終つて、女郎上りの女を引張り込みやアがつて、俺はモウ他人事とは思はねえ、残念で堪らねえ、就て先の内儀を一ツ皆なで改りやりてえと思ふんだ、丁度昨日八丁堀の馬場で遇たら、獨りで内職をして子供を養なつてるといつたが、感心ぢやアねえか、どうかして遣りてえと思ふんだけれども、此方等だつて、餘まり都合が好いんぢやアねえ、所で俺が考がえたんだが、何うだ、熊の野郎と今度の嫁アから金を取つて、先の内儀に遣らうツてんだ、皆な賛成して呉れ。△「成程、其つア面白い趣向だが、けれども先方で金を出すかな。○「其やア只は出さねえが狂言があるんだ。△「何だえ狂言といふなア。○「今夜彼奴等が寝てをる所へ突然に化けてくんだ。△「何だ化けてくツてえなア。○「幽霊を使うんだ。△「幽霊を使ふとは。○「先の内儀の幽霊を彼所の家へ出すんだ。△「ダツテお前先の内儀に昨日八丁堀で遇つたてえぢやアねえか、死なねへ者が幽霊に出られるかい。○「死んだつもりよ。△「ヤレ、レ。○「彼奴等の寝込んだ所を見澄して、屋

土橋亭う馬口演

落語忠臣藏

四六判全一冊  
口書數葉入

定價金三十錢  
郵税金四錢

此れは珍本落語忠臣藏、滑稽諧謔の底に義士が誠忠の熱涙を籠めて、軽い笑ひの中に知らず深い情致を覺える、謂はゞ御慰みが導く武士道の鼓吹、面白ふ響く山鹿流の一打は花やかに三流は、忠、孝、義、と渡る。  
演ずるは土橋亭う馬が自慢の箱書附、茲に一卷していで讀者が御待兼の門に討入らんずる。

内容

七	大	四	赤	三	勝	田
高	高	垣	段	段	田	舍
段	源	源	源	新	左	芝
目	吾	目	藏	目	門	居
三	神	粗	山	穴	高	田
崎	忽	忽	科	探	軍	兵
題	與	の	閑	居	し	術
五	使	者	居	し	術	術
郎	者	者	居	し	術	術
郎	者	者	居	し	術	術

附口演者身の上噺

小さん

燕枝



柳枝



左樂



玉輔



小三治



志ん馬



小せん

